

プロローグ

夕暮れが照らす高校の校舎。

部活動に励む者、放課後の無為なお喋りを楽しむ者、足早に下校する者。それぞれが思い思いの時を過ごす中、校舎の影に隠れるように一組の男女が向かい合っていた。

一人は少し背の低い少年、石黒陽太（いしぐろ 陽太）。天然の癖っ毛がぼさぼさに広がり、方向を問わず無造作に暴れている。髪を整えるといった身だしなみには無頓着なのだろう。やや華奢な体つきとおどおどした今の様子も相まって、どこか頼りない雰囲気醸し出している。

もう一人は長い黒髪の少女。眞白美月（ましろ みつき）。化粧っ気はないが、切れ長な鋭い目つきと高い鼻先の整った顔立ちをしており、美人と評して差し支えない。背も高く、制服のスカートから覗く黒タイトの長い脚がすらりと伸びている。

性別も容姿も対照的な二人が、夕焼けに照らされた校舎の影でじっと見つめ合っている。しかしそれは、年頃の男女が視線を重ねるロマンティックなものではない。

大きな瞳で相手を見据える美月は相手を警戒するように怪訝な表情をしており、対する陽太はそんな視線から逃れるようにキョロキョロしている。

出方を伺う二人。

しばしの沈黙を乗り越え、ようやく陽太が口を開いた。

「あ、あの！ 眞白さん」

「何かしら」

美月の返事におかしなところはなかったが、ぶっきらぼうな態度が威圧的に聞こえたのか陽太はまた萎縮してしまう。

焦りから額に汗を浮かべる陽太。それでも、なけなしの勇気を振り絞って次の言葉を投げかける。

「眞白さん！ 僕……ずっと前から、その」

美月は少し身構えた。

この会合は陽太が美月を誘い出したことを発端としている。その段階で美月も相手の用件をいくつか推理していた。

こうした状況は美月にとって決して初めてではない。中学時代にも似たような経験はあるし、そうした出来事から自分の容姿が多少なりとも他人より優れている自覚はある。それを鼻に掛けるつもりはないし、何より見た目だけを基準に声をかけてくる軽薄な相手に対しては都度断りを入れてきた。

根本を言えば、眞白美月は他人に興味をもたない。あるきっかけがあって、そうした距離の置き方を学んできたのだ。

今回もそれか、と心の中で少しだけ落胆する。

陽太から出る次の言葉を待ちながらも、美月は「ずっと前から」という言葉に違和感を覚えていた。ずっと前、に思い出などあっただろうか。

美月と陽太は高校二年生の進級ではじめて同じクラスになったばかりの関係だ。今はまだ四月。共に教室で過ごした期間はひと月に満たない。一年の頃は面識すらなかったはずだ。

なら、前からというのは嘘？ 想いを伝えるべき場面で出任せを話すような相手というのであれば、言葉を聞くより先に断りを入れるのが優しさかもしれない。

思うが早いかな、美月は口を開いた。

「申し訳ないけれど。私、そういうのは」

しかし次に陽太から出たのは、美月の予想を大きく外れた言葉だった。

「ずっと前から、君のファンなんです！」

「だからそういうのは。……はい？」

ファン？

告白……といえば告白なのだが、色恋沙汰だとばかり考えていた想像とは随分意味合いが異なる。突拍子もない内容に美月は戸惑う。

美月の高校生活はいえ、地味で平均的で平凡な日常そのものだ。クラスで率先して活動することも、部活動に励むこともせず、ただただ学生という貴重な時間を浪費していた。

クラスで存在が浮かない程度には愛想よく生きてきたつもりだが、その程度で同級生に愛好家ができるとは思えない。ましてや陽太と同じ教室で過ごした半月少々で、美月の魅力が引き出されるようなイベントは皆目見当もつかない。

先ほどまでの鋭い目つきはどこへやら、美月は呆けた顔でオウム返しに質問していた。

「ええっと……石黒くん、だったわよね。ファンというのは？」

「そ、そうですね！ 何のファンだって話ですよね！」

そんな美月の疑問に対して、陽太は自分が言葉足らずだったことを理解した。たどたどしく、その気持ちを説明し始める。

「クラスメイトになって顔を見た時、すぐにピンとききました。眞白さんって——フロストクインですよね！」

ふろすとくいーん。一般の人には聞きなれないであろう単語が飛び出してきたが、美月はそれが何か分かったようだ。

ただ、それに対する反応は少なくとも好意的なものではない。

思わず眉間に皺が寄る美月。

一方で語りのスイッチが入った陽太は、そんな彼女の表情に気づかず話し続ける。

「僕、デジモンコネクトオンラインの大ファンなんです！ 戦うデジモンたちも大好きなんでしょうけど、実力のあるテイマーを調べるのも趣味で！ フロストクイーンの活躍も、大会一年目から観てました！」

次々に飛び出す専門用語の羅列。熱が入っているのが伝わる喋り口で、気づけば陽太は身振り手振りを加えて力説していた。

しかし、言われれば言われるほど美月の表情は曇っていく。

「私、今は……」

「それでですね！ 実はこの四月から、うちの学校にデジモン部を立ち上げたんなんです！ といってもまだ部員は全然集まってないんですけど、眞白さんほどの実力者が入ってくればそれはもう」

止まらない陽太に、美月は思わず叫んだ。

「石黒くん！」

突然言葉を止められてキョトンとする陽太だが、そこでようやく、目の前の少女がこの話題に良い顔をしていないと気がつく。

「申し訳ないけれど。私……デジモンは辞めたの」

「え……」

陽太は美月の言葉にショックを受けた。

「だから、その誘いは受けられないわ」

部活動への勧誘文句を、美月はきっぱり断る。

何故、と追及したい気持ち呑み込む。すぐに理由を聞けないほどに美月の表情が苦々しく、それでいてどこか寂しげに見えたからだ。クラスメイトと言えど、きちんと会話をすることすら初めての陽太は、これ以上その事情に踏み入れることができなかった。

嫌な思いをさせたかもしれない。陽太は思わず謝った。

「こ、こちらこそごめんなさい……。僕、眞白さんとデジモンの話ができると思って、浮かれていました」

その言葉に、美月は寂しげな笑みを浮かべる。

先ほどまでの話しぶりは純粹な憧れによるもの。そこに悪気がないことはきちんと美月にも伝わっていた。

「ファンだって言ってくれたのは、嬉しかったわ」

精一杯の優しいフォロー。言いながら、美月はヒラリと身を反転させる。

「私が言えたことじゃないけれど。石黒くんはデジモン、頑張ってるね」

軽く手を振り、彼女は静かにその場を立ち去る。背中が校舎の向こうにある駐輪所に消え、その後自転車に乗って走っていくのを見送ってから、陽太はふっと息を吐き出した。

「眞白さん……。デジモンを嫌いになったのかな」

先ほど見せた、苦しそうな美月の顔が脳内にフラッシュバックする。

陽太は美月のことを何も知らない。美人なクラスメイトで、フロストクイーン。それだけだ。これ以上一人で思慮しても答えが出ないのは明白だったが、あの表情になにか放っておけないものを感じて、つい考え込んでしまう。

力になりたいなんて大それたことは言えないが、胸の奥で彼女への心配が少しづつ膨れ上がっていく。

## 1…デジモンコネクトオンライン

デジタルモンスター。略してデジモン。

それはバーチャルリアリティを駆使したゲーム『デジモンコネクトオンライン』に登場するキャラクターだ。多種多様な見た目をしており一概に括れるものではないが、ゲーム内では総じてデジモンという種族として扱われる。

ゲームを開始すると、最初にプレイヤーは氏名や生年月日を入力し、バイタル値やその時の精神状態に至るまで様々なデータを読み取られる。その内容を元にして、自分だけの相棒となるデジモンが誕生する。

生まれてきたデジモンは、食事やトイレの世話、戦闘用のトレーニングなど手塩にかけて育てていくことで「進化」する。生物学的なそれではなく、どちらかというと変身に近い見た目の変化が起こり、より強く逞しくなっていくのだ。

無限とも言える種類のデジモンを自由に育成し、誰も知らない最強の相棒を育て上げるのがデジモンコネクトオンラインの醍醐味だ。

育てたデジモンを駆使して、オンラインゲームの世界で競い合わせるのも楽しみの一つになっている。デジモンバトルは今やテレビやネット配信で中継されるほどの一大ムーブメントになっており、学校の部活動や社会人チーム、プログラマーも存在する競技種目として世間に定着しつつあった。

そして。  
そんなデジモン界隈でひと際話題となったのが、五年前に突如現れた幼い新星（フロストクイーン）だ。

当時まだ小学六年生でありながら大人と肩を並べて大会を勝ち進み、あつという間にその年の世界大会を優勝。さらにその後も連続でチャンピオンとなり、デジモンコネクトオンラインの歴史上はじめて三連覇という偉業を成し遂げたのだった。

プレイヤーとしての名前は別にあつたはずだが、感情を表に出さないクールな姿勢と、そんな彼女のパートナーデジモンである氷魔法の使い手——ヘクセブラウモンの華麗な戦闘スタイルから、人知れずついた呼び名がフロストクイーンである。

デジモンを遊んでいれば知らない者はいないほどの有名人。ゲームの競技シーンを駆け上がった名プレイヤー。

特に三年目の世界大会は名勝負だった、と陽太は思い返す。

アメリカ代表の挑戦者≪エネルギージュミ≫との決勝戦。彼が育てたデジモン・マルスモンは、自在な格闘術を扱う攻撃的なバトルスタイルで、それまでの対戦を勝ち抜いてきた。フロストクイーンこと眞白美月は、相棒のヘクセブラウモンと共に彼らと対峙する。

マルスモンが放つ、息つく暇もない拳の猛攻。

それをヘクセブラウモンは華麗に躲し、氷の連撃で足元の自由を奪う。マルスモンは腕から炎が噴き出している熱いファイターデジモンだったが、ヘクセブラウモンはそれを上回る冷気ですべてを凍らせ、白銀の中を踊るように舞い、手にした剣を振るってバトルを制した。

氷の粒が舞うフィールドは、美月とヘクセブラウモンのために用意された舞踏会場のようだった。

陽太はそれをスタジアムの観客席から見て、彼女の圧倒的戦闘センスに惚れ込み、憧れの選手として思いを馳せた。

「……なのに、辞めたって言ってたな。眞白さん」

部活勧誘に失敗した日の夜。自宅の浴槽に浸かりながら、陽太の思考はぐるぐると回っていた。

そんな彼に話しかける声の一つ。

「陽太は、随分と彼女を気にかけるね」

その声は陽太が風呂場に持ち込んだスマートフォンから聞こえた。だが通話ではない。スマートフォンに入ったデジモン育成アプリから、彼のパートナーデジモン——パラサウモンが話しかけてきたのである。

デジモンは多様な姿を持つモンスターだが、そのどれもが高度な人工知能を備えており、人と自然に会話することができるのも特徴だ。そのため本来の用途である対戦だけでなく、会話のできるペットとして愛着を持って育てている人も多い。

緑色の肌を持ち、鈍重な恐竜といった見た目をしているパラサウモンだが、自身の生体情報を元に生まれたパートナーデジモンは自然と性格もプレイヤーに似ていく。この妙に人間臭い怪獣は、陽太にとって気の合う相談相手になっていた。

「気にかけるというか……心配なんだ」

「心配？」

陽太はフロストクイーンがはじめて活躍した年から動向を追いかけている、生粋のファンだ。

小学六年生の頃、同い年で世界大会に出場した女の子がいると聞いて、急いで決勝の試合を見た。そのまま優勝した彼女の姿に胸が躍ったのを今でも覚えている。

その後も続く快進撃を陽太はずっと応援してきた。彼女が勝利を重ねていくことに、他人ながら勝手に勇気をもたらっていたのだ。

対戦中の彼女は異名のとおり常に落ち着いていたが、その目の奥にある輝きに陽太は魅せられていた。あれは心の底からデジモンが好きで、デジモンバトルを楽しんでいる人の表情だと強く思った。

だから。

心のどこかで、今日の勧誘も上手くいくと楽観的に考えていたのかもしれない。同じデジモン好きなのだから、少なくとも共通の話題で談笑ぐらいいは楽しめるはずだと。

やはり、彼女はデジモンを嫌いになつたのだろうか。

「そういえば眞白さん、三年前の大会を最後に表舞台から姿を消したんだった」

三年前、正確に言えば決勝はその年の年度末に行われるため二年と少し前になるが、彼女が三度目の王座を獲得した後、それまでの活躍が嘘のようにフロストクイーンは大会に現れなくなった。どこかの予選で負けたわけではなく、その姿をゲーム内で誰も見かけなくなつてしまつたのだ。

彼女の大会不参加は判明した当初こそ大きな話題になつたが、世間の注目は次第に移り変わっていく。

あつという間にフロストクイーンは忘れ去られ、気がつけば翌年のチャンピオンが誕生していた。そのチャンピオンも現在二年連続で優勝しており、今年三連覇がかかっている猛者だ。その人物が今年も優勝して記録が並べば、今度こそ美月のことを話題に出す人はいなくなつてしまうかもしれない。

また、美月の表情を思い浮かべる。

「眞白さんの悲しそうな顔。あれは今でもデジモンが好きで、でもなにかの事情でプレイを諦めてしまった人の顔だ……っていうのは、考えすぎなのかなあ」

言いながら、大きな溜め息を漏らす陽太。

「じゃあ、また話しかけて確認してみるかい？」

「でもさ。あんまり何度も話しかけると、しつこい奴だつて思われなかな」

「一人で風呂に入りながら、ずーっと彼女の顔を思い浮かべてるのは、もうかなりしつこいよ」

「うっ……確かに」

パラサウモンに痛いところを突かれて、陽太は黙り込む。

そしてまた考え込み、思考が堂々巡りして、浴槽の中で終わらない疑問を走らせ続ける。どれぐらい経つただろうか。不意に浴室扉の向こうから声がした。

「兄ちゃん、お風呂長いよ！ 私も入りたいんだから、ゲームと喋ってないで早くしてー」

陽太の妹、石黒明乃（いしぐるあけの）だった。確かにずっと悩みながら湯舟に浸かっ

ていたので、かなりの長風呂になってしまっている。

「はい。今上がるー」

陽太はようやく風呂から上がった。

まだ頭の中がぐるぐるする。ずっと同じことを考えていたからか、その考えが一向にまとまらないからか。

いや、このぐるぐるは……。

「あぶぶぶぶぶ」

風呂場の扉を開けた陽太は、そのまま泡を吹いて脱衣所に倒れこむのぼせていた。

「よ、陽太！ 駄目だ、相棒である僕を置いて逝くなあ！」

「お母さんお父さーん！ 兄ちゃんが素っ裸で死んだー！」

薄れゆく意識の中、パートナーと妹の声が頭の中で鮮明に響き渡った。

「し、死んで……ないよ……」

○

数日後。

あの日以降も陽太と美月は教室で顔を合わせていたが、まだ陽太は一度も話しかけることができずにいた。勧誘を断られた以上当然だが、美月側からのアプローチもない。

何も起こらない悶々とした日々を過ごす内に時期は五月になり、気づけばゴールデンウィークがやってきた。学校もしばしの休みに入る。

この日、陽太はデジモンの専門ショップへ足を運んでいた。気晴らしを兼ねた外出。デジモンのイラストがプリントされたシャツを着て、生粋のファンらしい格好で店内を見ている。

デジモンショップは、ブームとなったデジモンのグッズを多数取り扱うオフィシャルショップだ。デジモンに関するキャラクターアイテムが揃っているばかりか、自宅のパソコンからデジモンコネクトオンラインに接続するためのヘッドマウントディスプレイや、オフライン上でデジモンを育成するための小型液晶端末——デジヴァイスと呼ばれるガジェットに至るまで、あらゆるギアを取り揃えているのが魅力である。

実際のところ、スマートフォンやパソコンだけでもデジモンの育成は可能だ。仮想空間へのログインも、このショップ内やアミューズメント施設に置かれているゲーム筐体から行なうことができるため、自宅でわざわざ機材を揃える必要はない。

それはそれとして、こうした専門用品が並んでいるのはそれだけで心惹かれるものがある。

さらにオフィシャルショップには、育成に行き詰った際にデジモンを診断してくれる診

察室のようなスペースも設けられている。公式スタッフによる手厚いアドバイスを受けられるのだ。

ショップ、オンライン用筐体、アドバイザー。デジモンを楽しむあらゆるプレイヤーの味方となるこの場所は、陽太にとって何度来店しても飽きない聖域だった。

この日も目当てのグッズを探し、その後も隅から隅まで店内を眺めながら至福の時を過ごしていると、ふと気になる人影が視界に入ってきた。

「……ありがとうございます」

「はい。また分らないことがあったら聞きにきてくださいね」

公式スタッフと共に、診察エリアから出てきた一人の少女。

眞白美月だ。

細身のジーンズと白のシャツ、その上から淡い水色のカーディガンを羽織った私服姿。

普段学校で見る制服と印象が違うためすぐには気づかなかったが、長い黒髪と背の高いシルエットで判断がついた。

なんたる偶然。陽太は思わず商品棚の陰に隠れてしまう。

「ま、眞白さんとこんなところで出会うなんて」

「なんで隠れるんだよ！」

手にしていたスマートフォンから、パラサウモンがツツコミを入れる。

まさかデジモンショップに美月がいるとは。彼女はデジモンを辞めたと言っていたが、今でも興味自体はあるのだろうか。

陽太は妙にドキドキしながら次の行動を考える。クラスメイトとして気さくに声をかけるべきか、一旦見なかったことにしてこの場を後にするか。

「陽太！ よく見て」

「え？」

「彼女が出てきた場所だよ。あそこは……」

パラサウモンの言葉で「そういうえば」と陽太も気がつく。

「眞白さん、診察室から？」

繰り返すが、診察室はデジモンの健康状況を測定したり育成に行き詰った際のアドバイスが貰える場所。つまり、それを利用してユーザーは当然現役のデジモン育成者——テイマーと呼ばれるゲームプレイヤーに該当する。

「つまり眞白さんは、今デジモンを育てている……!!」

それに気がつくのと、先ほどまでの悩みはどこへやら、陽太は美月の前へと飛び出していた。

「ま、眞白さん！ こんにちは」

「石黒くん？ ……どうも」

棚の奥から突然やってきたクラスメイトに、美月も目をぱちくりさせている。何故隠れ

ていたのかと不審がられてもおかしくないのだが、ひとまず彼女はそこに言及しなかった。ただし先日の一件があったため、美月もどこかやりづらそうにしている。考えなしに声をかけた陽太だったが、いざ対面して話すと前回の出来事を思いだして言葉に詰まった。デジモンについてのんびり談笑とはいかない。

先日の一件で美月に嫌な思いをさせたのではないかと陽太はずっと考えていた。苦しそうな表情の裏には何があるのか、少しでも自分が力になれることはないかと。

どうせ悩んでいても埒が明かないのだ、ここで聞くしかない。陽太は自分を鼓舞しながら言葉を絞り出す。

「眞白さん、デジモンの診断受けてたの？」

「あー……」

困った顔をして視線を逸らす美月。

「見られちゃったのね」

言いながら、上着のポケットから育成用端末であるデジヴァイスを取り出した。このデジモンショップでも売られている小型端末。どうやら彼女はスマートフォンアプリではなく、こちらでデジモンを育てているらしい。

画面にはペンギンのようなキャラクターが映っている。小さなドット絵で端末の中を動き回っているのが見えた。

「うわあ、ペンモンだ！ 可愛いですよね！」

陽太は表示されているデジモンの種族名を言い当て、にこやかに画面を見つめている。

「へえ、流石ね。見ただけで名前分かるんだ」

「当然！ 僕、バトルはあんまりですけど、知識なら結構自信があるんです」

自慢げに伝える陽太。胸を張って答えるその姿に美月は素直に感心する。

すると、デジヴァイスからも声が聞こえてきた。

「あちゃあ。アタシのことバレちゃったね、美月」

美月のパートナーデジモンであるペンモンの声だった。隠し事だったことはペンモンも理解していたということだろう。たしなめるような言い方の相棒に、美月は静かに視線を送る。

「成長期のデジモンってことは、ここ最近また始めたんですか？」

成長期、というのはデジモンの成長段階のことである。デジモンはテイマーのデータを讀み取ってタマゴを生成し、最初は幼年期という赤ちゃん形態として誕生。その後しばらくゲームを進めると、進化して成長期に到達する。

バトルができるようになるのは成長期からであり、この姿になるのは比較的容易に設定されている。幼年期をチュートリアルとして、本格的にゲームを開始するスタートラインと言えるだろう。

先日の美月はデジモンを辞めたと言っていたので、最近またゲームを始めたのではない

かと陽太は推測したのだ。

しかし、彼女の返事は予想に反するものだった。

「この子は、二年前からこの姿なの」

「に、二年!？」

思わず目を丸くして驚く陽太。

通常、デジモンの成長は数日単位で起こる。育成を怠けていたり、そもそもゲームを起動していなければ育成が止まることもあるが、同じデジモンを何年もかけて育成することはかなり稀だ。

しかも美月は、かつて究極体であるヘクセブラウモンを育てたテイマーである。究極体は成長期よりもずっと先の育成段階で、そこまで到達できるテイマーは少ない。そんな高難度の育成をこなす実力を持っているのだから、成長期のデジモンを育てきれず放置しているとは考えづらかった。

美月はペンモンを見つめながら寂しげな表情を見せる。

「この前はデジモンを辞めたって言ったけれど……私って嘘つきなの。今日ここで石黒くんと会ったのは、あの日の責任をとるためかもね」

自嘲気味に語る美月。陽太の勧誘を断ったことに、どこかで負い目を感じていたのかもしれない。

やがて彼女は何かを決心した様子で顔をあげた。

「少しだけ、付き合ってもらえる?」

まっすぐな視線で陽太を見つめる美月。吸い込まれそうなほど澄んだ瞳に、陽太はゴクリと唾を飲んだ。

「も、もちろん!」

元々事情は聞きたかったのでこの提案は願ってもみないチャンスだ。気弱な陽太にとって他人の過去に深入りするのは決心を要する決断だったが、憧れのフロストクイーンが悩んでいるなら少しでも力になりたい。心の底からそう思った。

○

二人で近場のカフェに入る。連休中の店内はかなり混みあっていたが、運よく二人で腰かけれるテーブル席が空いた。対面に座る。

美月の前にはクリームがたっぷり乗ったアイスコーヒー、陽太の前にはシンプルなホットコーヒーを置いた。隣の席で女子高生のグループが食べているアイスの乗った巨大パンケーキに惹かれるものを感じながら、陽太はコーヒーに口をつけた。

二人とも話を切り出すタイミングを見つけられず、飲み物を口に運ぶだけの時間が数分続く。しばしの無言。

陽太のコーヒーが温くなるぐらいの時間が過ぎた頃、ようやく美月が重い口を開いた。「私は、ある理由があつてこの子を育成しているの。理由は……ごめんなさい、まだ言えないのだけれど」

彼女の指が、コーヒーの横に置いた自身のデジヴァイスを撫でる。

その表情は端末内で動き回るペンモンへの慈愛に満ちていたが、同時に、やはり寂しそうな影が見える気がした。

「次、試合に出るならこの子を育てて戦うつもりだった。でも……この子は一向に進化しなかった」

「進化、しない？」

陽太は疑問を持つ。

デジモンの進化はテイマーの育成方法に左右される。食事や睡眠、トイレの世話からトレーニングメニューに至るまで様々な要因が絡み合い、次の姿が決定づけられていく。どこかで育て方を間違えて進化条件を満たせない場合もあるが、相手はトッププレイヤーの美月だ。そんなミスはしないだろう。

「診断も定期的に受けているけれど、答えは同じ。育成状況は良好でコンディションも抜群。なんなら明日にでも進化するんじゃないかって、何度も言われたわ」

「それで、二年も？」  
「そう。おかしいでしょ？」

美月は笑った。陽太は彼女の笑顔を初めて見た気がするが、楽し気に映りはしない。話を聞く限り、現状はかなり不自然だ。長く育成してそれでも進化しなないとすれば、普通は個体の不具合や機材のバグを疑ってもおかしくない。

デジモンを本物のペットのように愛好するプレイヤーがいるのは確かだ。しかし大会に挑むようなテイマーであれば、時には新しい相棒を育てるためにデータをリセットしたり方針の変更を決める非情さが必要な場合もあるだろう。

だが美月はそれをせず、二年間ずっとペンモンの育成に向き合ってきた。  
それはつまり。

「眞白さんにとつてペンモンは、なにか……特別なデジモンなんですわ」

陽太がそう結論づけると、美月は首を縦に振った。

そこにどんな理由があるのかは話せないと言っていたが、かつてのチャンピオンが大会出場を辞めてまでペンモンに専念している事実は、そこに並々ならぬ思いがあることを表している。それを聞いてリセットを提案するほど、陽太も薄情ではない。

そして、美月も覚悟のほどを示すように力強く言った。

「この子で戦いたい。これは私のエゴ」

新しい相棒とどうしても戦いたい理由。陽太には見当がつかない。

深くは追及してこないものの明らかに疑念が漏れ出ている陽太の表情を見て、美月は改

めて先日の勧誘に対する答えを示した。

「私は勝利よりも、このペンモンを育てることを選んだ。こんなの、部活動には邪魔な考え方でしょ？ だから断ったの」

そう言われて陽太も合点がいった。彼女は何らかの都合でペンモンを主戦力にしたいが、それで誰かに迷惑をかけたくない。部活動に参加すれば他校との交流戦や大会に出場することになるし、そこで足を引っ張りたくないと考えたのだろう。

突然話しかけてきたクラスメイトの部活動勧誘に対して、そこまで相手のことを思っただ断ってくれたのだ。

「優しいですね、眞白さん」

「優しい？ 私が？」

陽太の言葉にぼかんとする美月。

今の会話で陽太は強く感じていた。やはり美月はまだデジモンを好きなのだ。だからこそ今現役で戦っているテイマーの邪魔はできないと判断してくれた。何より、不安を感じながらもペンモンを育成し続ける行為は相当の覚悟と愛情がないと二年も続かないはずだ。美月は「買い被りすぎだ」と陽太の発言を一蹴する。

「私は冷たい視線で戦うフロストクインよ？ 優しいだなんて……」  
そうしてまた、自分を卑下するような悲しい顔を見せる。陽太はそこに違和感を覚えていた。

彼女はデジモンコネクトオンラインのプレイヤーとしてトップクラスの実力者で、もはや謙遜する意味もないほどに有名な存在だ。これまでの会話から、デジモンへの愛も人一倍あり、他人への気遣いもできる人物だと確信した。

彼女の素性をほとんど知らない陽太だが、今の美月を見ているのは辛い。かつての栄華さえも無かったことにしているように思えて、気づけば想いを吐露していた。

「僕は、大会で戦う眞白さんを見ていました」

過去の話に、美月は少しだけ躊躇する表情を見せる。陽太は構わず続けた。

「対戦中の眞白さんは、目の奥をキラキラ輝かせていて、格好よくて……僕の憧れだったんです」

三年間の活躍。それが陽太の知っている美月に関する全てで、それを知っているからこそ彼女のことを尊敬している。

陽太の言葉に一瞬目を見開いた美月だったが、そのまま内容を反芻するように静かに目を閉じ、不意に呟いた。

「石黒くんも……おんなじこと言うんだ」

「えっ？」

「なんでもないわ」

疑問に思うよりも先に、突然美月はある提案を持ち掛ける。

「ねえ石黒くん。デジモンバトルしない？」

「え……ええっ!？」

デジモンバトル。憧れのフロストクイーン——眞白美月と対戦？

あまりにも急な誘いに、陽太は口を開けたまま固まってしまう。

驚く陽太を余所に、美月は続けた。

「私が勝ったら、この件は忘れて。私がペンモンの進化に悩んでいることも、部活への勧誘も、その他疑問に思ったことも全部なかったことにしてほしい。私達は、会話もしたことのないクラスメイトに戻る」

矢継ぎ早に出された提案に、陽太は少し考える。

元々、彼女を部活へ誘うのは一度失敗したようなものだ。ペンモンや美月に対する疑問も、ただのクラスメイトである今のままではこれ以上知りようがない。

なら負けても今と何も変わらない。受けない理由はないだろう。

だったら、と陽太も答える。

「僕が勝った時は、これまで疑問に思ったことを全部教えてください。そして……可能なことだけでいいので、僕に手伝わせてください」

真剣な眼差しで伝える陽太。その提案に、美月は呆気にとられる。

「いいけれど、それって石黒くんに得がないじゃない。なんで、私のことを手伝おうとしてくれるの？」

疑問は最もだった。この四月から同じクラスになっただけの少女が抱える悩みを一緒に解決したいという、不可解な提案をしていることは分かっている。

陽太の中に明確な答えがあるわけではなかった。

「正直、分かりません。憧れのテイマーが近くで悩んでいるなら、力になりたいってだけなのかも。とにかく、何もしないのは、その……なんか嫌なんです」

力強く、しかし曖昧な答え。美月はその返答に困ったように言う。

「変なお節介さんね」

「べ、別にいいじゃないですか!」

お節介。その通りだ。陽太は自分が余計なことを言ったのではないかと焦る。

しかし、美月は表情を緩めた。

「うん、別にいい。……むしろ、そこまで他人を思えるなんて、素敵なことよ」

どこかミステリアスな雰囲気を持つ美月がみせる、自嘲ではない自然な笑顔。陽太はその表情に少しドキッとする。

彼女が立ち上がった。デジモンコネクトオンラインのオンラインマッチをするならば、デジモンショップに設置されているゲーム筐体を使うのが早いだろう。対戦するとなればすぐ店に戻ろうという動きだ。

「一応、言っておくけれど」

美月の目が鋭くなる。

「私、結構強いわよ」

「知ってます！」

その強さと眩しさを応援していたのだ、もちろんん実力は重々承知している。

「だけど、僕のパラサウモンは成熟期ですし、本気でいきますから」

陽太は残ったコーヒーを一気に飲み干し、連れ立ってカフェを後にした。

○

デジモンコネクトオンラインは、パソコンやゲーム筐体から仮想空間にアクセスして楽しめる大規模なオンラインゲームになっている。

大会などのイベントを行うスタジアムだけでなく、さまざまな景観のエリアが用意されており、ティーマー同士バトルコートで野良試合を楽しんだり、パートナーデジモンや他のティーマーとのんびり交流したりと、遊び方は自由だ。ティーマーとデジモン用にコスチュームやアクセサリを販売しているショップもあるので、ゲーム内でお洒落を楽しむ人も多くいる。

陽太と美月は、都市エリアのフリーバトルコートへとやってきた。

都市エリアはゲームのエントランス的な立ち位置の場所で、ファッシュョンショップやゲーム内アイテムの販売所なども立ち並ぶ中心街となっている。初心者向けのナビやヘルプ案内もこのエリアに集中しているため、はじめてのプレイヤーから上級者まで多様なティーマーが集う場所だ。

「へえ。これが石黒くん……じゃなかった。《アースリン》のアバターと、パートナーデジモンね」

まじまじと自分のアバターを観察され、気恥ずかしさを覚える陽太。アースリンは陽太のティーマーネームで、ゲーム内ではマントやグローブを身に着けた勇ましい見た目になっている。首元にかけられたゴーグル型のアクセサリがお気に入りポイントだ。

デジモンコネクトオンラインは、成りすまし防止などの観点から顔だけはプレイヤーのままスキャンして出力されている。そのため身バレを防止するために仮面などの顔装飾を装備している人も多い。陽太はサンバイザー型の帽子を深めに被っていた。

隣には緑の恐竜、パラサウモンが連れ立っている。頭部に果物のような植物が生え、人が跨っても充分なほど大きな図体。力強い見た目に反して性格はおとなしく、動きもゆったりしたデジモンだ。

「し、知り合いにティーマーネームで呼ばれるのって……なんだかむず痒いですね」

「今更？ 私のことは散々フロストクイーンだって連呼していたのに」

「いや、そうなんですけど！」

指摘されて、ぽりぽりと頬を搔く。

一方の美月は、白と青を基調とした騎士のような出で立ち。頭部のアイテムは雪の結晶を象ったイヤリングが光るのみで、堂々と顔を見せている。顔が分かるからこそ、その鋭い眼差しからフロストクイーンの異名が付き、一緒のクラスになった陽太は一目で正体を見抜くことができた。

彼女には《アクエリー》というティマーネームもあるが、誰が呼んだのか定着したフロストクイーンの異名が轟きすぎて、コチラの名前は忘れられていることが多い。

実際、陽太もユーザーデータを開いて改めて名前をチェックしていた。

「えーっと……アクエリーさん。改めてよろしくお願いします！」  
名前を馴染ませるように畏まった挨拶する陽太。

と、美月の隣にいた青いペンギンデジモン、ペンモンが声を荒げた。

「二人とも余所余所しいわねえ。名前なんて、普段呼んでる本名でいいじゃない」

他人行儀な会話に思うところがあつたらしく、面倒くさそうに指摘してくる。どうやら美月と違つてはつきりとモノを言う性格のようだ。

「ええっ？ でもアクエリーさんは有名人だし、本名バレちゃうとマズくないですか？」

至極もつともな指摘。トッププレイヤーである美月は広く顔が知られているし、本名まで分かるリスクがある。インターネットリテラシーというやつだ。

美月は「一理あるわね」と頷きつつも、それとは別に、ずっと気になっていた点に触れる。

「ねえ石黒くん。名前もそうだけれど……その敬語、やめにしない？ 同じクラスなんだし」

ここまで陽太は美月に対して敬語で接してきた。それは兼ねてよりファンだった憧れの存在・フロストクイーンに敬意を込めることだったのだが、美月的には距離を感じて嬉しくなかったようだ。

恐れ多いと思いつつも、陽太はその意見をぎこちなく受け入れる。

「わ、分かりま……分かった。改めて対戦よろしく、眞白さん」

「うんうん。よろしく、石黒くん」

結局、敬語と共にティマーネーム呼びも有耶無耶になった。

こうして二人とパートナーデジモンは無事顔合わせを済ませ、それぞれバトルコート両端に立った。空中にメニュー画面を開いてフリー対戦モードへのエントリーを実行する。前述のとおり都市エリアはゲームの中心地だが、今このバトルコートにいる人の数はまばらだ。デジモンコネクトオンラインは多数のエリアに分かれているので、休日の昼といえど一か所に人が集まることは早々ない。

二人がコートで向き合い対戦準備を進めていると、数人のティマーが物珍し気に観客席へと座った。

バトルコートといっても大会が行われるスタジアムとは違い、ベンチの数もたかが知れている穏やかな会場。フロストクイーンの復帰戦としては物足りないようにも思えるが、正体が知れ渡って話題になることは美月自身も望まないだろう。陽太にしても、注目されすぎると緊張するので今の状況は都合が良い。

二人の対戦承認コマンドを受けて、ゲームの進行音声アナウンスする。

「《アースリン》バーサス《アクエリー》。バトル——スタート！」  
対戦開始。

音声と共に、最初に動き出したのは美月とペンモンだった。

「ペンモン、まずは氷の刃をお見舞いするわ」

「オッケー！ アイスプリズム！」

美月の指示を受けて、ペンモンが地面を思い切り叩く。ペンモンの手のひらから冷気が伝わり、氷柱が大地を突き破りパラサウモン目掛けて飛び出してきた。

ペンモンが得意とする必殺技の一つだ。

相手の攻撃を見てパラサウモンへ指令を送る陽太。

「パラサウモン、避けて！」

「応！」

指示を聞いたパラサウモンは、次々と突き出してくる氷の刃から逃れるようにバトルコートを疾走した。パラサウモンは鈍重なデジモンだが、地面を移動しながらゆっくり迫るペンモンの冷気ぐらいなら充分対応可能だ。

ペンモンの氷が、逃げるパラサウモンを追いかける。

何度放つても一向に当たらないアイスプリズムだが、美月とペンモンは絶えず攻撃を続けている。行動を変える様子はない。

陽太は相手の行動をじっと見つめ、それがどんな作戦なのか必死に考える。

しばらく追いかけてここに興じていたが、フィールドに充滿した冷気が地面そのものを凍らせ、不意にパラサウモンの足がとられた。

「おっとー！」

よろけつつも、パラサウモンはすぐさま体勢を立て直して疾走。この程度の隙で追いつめられることはないが、それを見て陽太は推理した。

「まさか、この氷は移動を妨害するため……？」

既にバトルコートには無数の氷柱が突き出し、徐々に移動範囲を狭めつつあった。凍った地面もパラサウモンの行動を制限する足枷となるだろう。

なるほど。時間をかければかけるほど行動が制限され厄介になるといふことか。陽太は即座に判断して、次の指示を飛ばす。

「パラサウモン！ 君の技で氷を吹き飛ばせ！」

パラサウモンはコクリと頷くと即座に進行方向を反転、迫る氷柱へ正面から向き合った。

そして、大きく息を吸い込み——咆哮。

「ウェイビーオクタヴィスト！」

パラサウモンの必殺技が発動。

その口から放たれる重低音の鳴き声が、大音量の地響きとなって周囲の障害物を粉々に砕く。音波による破壊力抜群の一撃。

ガラガラと音を立てて崩れる氷柱たち。地面に張った氷も振動によって突起が均され、フィールドはたちまち視界良好なアイスリンクへと変貌した。

ペンモンは柱を盾にしてウェイビーオクタヴィストを回避したようだが、今の技で氷柱はすべて取り除かれた。障害物のない今、もう一度必殺技を撃てば次の攻撃は避けられない。

陽太は不敵に笑う。

「これで行く手を阻むことも、死角に逃げることもできないよ！」

作戦を見破ったと高揚する陽太の挑発。

美月はボーカーフェイスを貫いており、陽太の行動によって計算に狂いが出たのかは判断できない。すうっと深呼吸をしたが、動揺を落ち着かせるものだろうか。

しかし隙ができたとしたら今しかない。陽太はパラサウモンに次の指示を送る。

「ペンモンを正面に捉えて、撃て！」

「パルシースイート！」

パルシースイートは、相手を痺れさせる強力なガス攻撃。こちらもパラサウモンの得意とする技だ。

ペンモンめがけて一気に口内のガスを吐き出す。正面に立つペンモンはどこかに隠れることもできないはずだ。

だがそれを見て、美月が動く。

「ペンモン。ステージはできたわ」

「はい、行つくよー！」

次の瞬間。ペンモンが腹ばいになって氷の地面を滑り始めた。

パラサウモンが追いきれないほどのスピードで滑走すると、そのまま背後に回って体当たりをぶつける。

「スライドアタック！」

一度攻撃を加えると、再び滑りだしパラサウモンから距離をとる。こちらが振り向く頃には、また別の角度から背後に回り込んで攻撃。ヒットアンドアウェイで次々にダメージを与えていく。

この試合、陽太の優位性は揺るぎないはずだった。

パラサウモンは成熟期という育成段階。ペンモンが属する成長期からもう一段階進化した姿だ。成長レベルの違いによってデジモンの基礎能力には大きな差が出るため、より上

位に進化している方が有利だというのが一般的な見方だろう。

今も、ペンモンの与える一発一発は大きなダメージとは言えない。パラサウモンの筋肉質な体がペンモンの体当たりを受け止め続けている。

それでもペンモンが攻撃を繰り返す限り、じわじわとダメージは蓄積していく。いくら攻撃力や防御力に差があるといっても、積み重なる痛みは次第にパラサウモンを弱らせていった。

ここで、陽太はようやく美月とペンモンの行動意図を汲み取った。

「まずい！　アイスブリズムを撃っていたのは、最初からこの移動方法を使うためだ！」

ペンモンは鳥型のデジモンだが、その羽は退化しており飛行はできない。徒歩での移動もその小さな足では速さが出ない。基本的には素早さに難のある種族と言える。

だがペンモンは見た目どおりペンギンを模したデジモンだ。特技としてトボガン——氷上を腹ばいで滑ることができる。

そこで美月は、ペンモンが有利になるようなステージを作ることには終始していたのだ。

視界を塞ぐように氷柱を立て続ければ、やがて陽太とパラサウモンはそれが死角になることを嫌って柱を砕くことになる。フィールド全体を攻撃するような技を撃てば、氷は平らになり、滑走可能なアイススケート場の完成だ。

いや。それでなくとも、バトルが続けば氷は次第に溶けだすだろう。それをペンモンの冷気で再び凍らせれば、結果として均されたスケートリンクは形成できずに違いない。

「そこまで計算して……！」

もちろん、完璧な作戦とは言えない。フィールドが綺麗に均されるような範囲技をこちらが使うかどうかは分からないし、長期戦で氷が解けるのを待つにはレベル差が足を引く張る。それでも、美月とペンモンはこの状況を作れるという自信があったのだろう。

こうなると、陽太とパラサウモンは一転して不利になった。

ペンモンは見た目に反して近距離での肉弾戦を得意とするデジモンだ。体当たりや格闘による攻撃で接近戦を仕掛けてくる。

一方、パラサウモンは遠距離から音波やガスを相手にぶつけて戦うスタイル。氷を滑ることで素早さを手に入れたペンモンを相手に、その姿を捉えて長射程技を狙い撃ちするのは困難になったと言える。

しかも、均したとはいえフィールド全体が凍っているのでパラサウモンにとって歩きづらいことには変わりはない。気温も徐々に低下しており、恒温動物たる恐竜を模したパラサウモンの体力はじわじわ消耗させられている。

寒冷地を活かせるペンモンが有利になるよう、完璧に作られた試合だ。

追いつめられた。だが。

「すごい。すごいや真白さん！」

陽太自身は、窮地ながら興奮していた。

美月が表舞台を退いて二年以上。何があったのかはまだ聞けていないが、彼女がそれ以来何もしていなければ腕が落ちていた可能性はあった。精神的に落ち込んでいたならば、それが戦闘に支障をきたす心配も。

だがそれはすべて杞憂だった。今まさに、彼女の計略を間近で見せつけられている。なによりも、目の前の少女は対戦しながら目を輝かせている。ポーカーフェイスの瞳の向こう側に光る彼女の意思。このバトルを楽しんでいることが伝わってくる。

現役時代から何も変わらない、彼女のまっすぐな闘志。

ならば全力でぶつかりたい。同じテイマーとして恥じぬ勝負をしたい。

陽太が叫ぶ。

「パラサウモン！ 少しでも広範囲に向けて技を撃つんだ！」

「ぐっ、分かった！」

相手がスピードで翻弄するなら、こちらは範囲攻撃でその足を止める。作戦はすぐにパラサウモンへと伝わった。

「ウェイビーオクタヴィスト！」

再び咆哮。爆発力は落ちるが、その分なるべく広く相手を捉えられるように雄叫びをあげる。

しかしこの動きも美月に読まれていた。好機とばかりに動き出す。

「ペンモン、相手が必殺技を構えた。足が止まっている今なら確実に決められるわ！」

「よーし！」

ペンモンは腹ばい移動のままパラサウモンの攻撃をかわし、背面へと回り込む。そこから飛びあがり、後頭部に向けて必殺技を叩きこんだ。

「無限ビンタ！」

ペンモンがパラサウモンの首筋を引つ叩く。一撃一撃は成長期の非力な技だが、ペンモンの無限ビンタは高速で攻撃を繰り返すことにより、一か所に集中して負荷を与えることが可能だ。

バシバシとパラサウモンを殴りつけるペンモン。

痛みからか、いつの間にかウェイビーオクタヴィストの咆哮は止まってしまった。パラサウモンは歯を食いしばって攻撃に耐えていた。

振りむいて捉えられるか？ いや、パラサウモンの動きではペンモンを取り逃がす可能性が高い。攻撃の手が緩まるチャンスを見つけてその隙に……。

陽太はパラサウモンを心配そうに見つめながら、懸命に次への糸口を探す。

だがここで。

突然、パラサウモンが痙攣するようにその場へ倒れこんだ。

「えっ！？」

陽太が空中にゲームコマンドを開き、ステータス画面を確認する。表示されているデー

夕は、今もパラサウモンの体力が半分以上残っていることを告げていた。

しかし、実際に相棒は倒れ、ペンモンだけがフィールドに仁王立ちしている。

美月が淡々と宣言する。

「勝負ありよ、石黒くん」

「いや、まだだ！ 起きて、パラサウモン！」

陽太が叫ぶが、パラサウモンはその場でぐったりと倒れたまま。

ゲームの進行音声も対戦結果を伝えた。

「パラサウモン戦闘不能！ 勝者《アクエリー》！」

うおおおお！ と歓声が沸き起こる。気づけば白熱する試合を多くのタイマーが観客席から見守っていた。

未だ状況が理解できずに茫然としている陽太。そこに美月とペンモンが駆け寄ってくる。

「どうして決着が……」

疑問に思う陽太へ、美月が冷静に説明する。

「頭から首のあたりって、弱点になりやすいのよ。人間でもあるでしょ？ 首をトントン叩いて気絶させるやつ」

美月が手刀の要領で手のひらを動かしてアピールする。

デジモンはゲーム内のキャラクターだが、その体は実際の動物にかなり近い構造で設計されている。首から頭にかけては複数の神経が通っており、そこを重点的に叩くことができれば、相手の体力を削り切らずとも気絶させられるのではと美月は考えたのだ。

「気絶……。そんな手があったなんて」

拳を握り、わなわなと震えて地面を見つめる陽太。

その様子を美月が心配そうに見つめる。怒っているのか悔しがっているのかは分からないが、なんとなく気遣いでフォローを入れた。

「まあ、格上のデジモンが相手なのは分かっていたから搦め手はたくさん考えたわ。長期戦にもつれ込ませるなんて、一か八かの作戦だったし。あのパワーに正面からぶつかればペンモンだってひとたまりもなかったもの。だからそんなに気を落とさず、」

「……す」

不意に陽太が何か呟いて、美月は発言を中断される。

「す？」

「すつつつごいよ眞白さん！ やっぱりトッププレイヤーは違うなあ！」

瞳を輝かせ顔をあげる陽太。どうやら体を震わせていたのは、熱いバトルに感激していたからのようだ。

美月も肩の力を抜き、緊張を解く。

「そう？ 私としてはこれぐらい、どうってことないわ」

「もー！ 素直じゃないんだから。美月が燃えてたの、アタシにも伝わってきたよ」

澄ました顔で言う美月の言葉をペンモンが訂正した。美月はペンモンを軽くないです。「一々言わなくていいの」

最後に出場した世界大会から二年と少し。あれから他人とのバトルを避けていた美月とペンモン。表舞台からいなくなることによって彼女自身も環境の最前線には戻りづらいと思っていたが、今日のバトルは良い刺激になった。

陽太は美月の中に確かに残っていた情熱を感じて嬉しくなる。だがそこで、対戦前の約束を思い出した。

「眞白さんに負けちゃったな。これでこの件に関しては……」

美月からの約束は、彼女が勝ったらこの件については終わりにするというもの。

美月がペンモンに拘る理由も、この二年間に関する様々な事情も、もう陽太が知ることはない。

悔しくないといえ嘘になる。彼女の寂しそうな表情を見て力になりたいと思ったのは陽太の本心だ。それが自分の実力不足で叶わなくなったのは悔いになるだろう。

しかし約束は約束。そこに二言はない。

「眞白さん、本当にありがとう。バトルできて嬉しかった」

「……私も、本当に楽しかった」

二人とも、噛みしめるように再び感想を言う。どちらからともなく手を差し出して、固い握手を交わした。

陽太は勝敗を受け入れ、手を振りながらログアウトボタンに手をかける。

これで陽太と美月はただのクラスメイトに戻る。美月が憧れのティマーであったことは一度忘れ、日常生活を再開しなくてはならない。

## 2…デジモン同好会

ゴールデンウィークが終わり、再び学校生活が始まる。

勝負が決着したことにより、陽太は美月に対する接点を失ってしまった。クラスメイトとはいえ話したこともない間柄。一度は対戦を通じて仲良くなれた気がただけに寂しさは拭いきれず、陽太は休み明けの一日をぼうつと呆けた状態で過ごした。

そして放課後。

久しぶりに部室へと顔を出す。

デジモン部は現在、二人しか部員がない。つまり陽太以外の部員はたった一人だけ。陽太の通う高校では人数が集まるまで正式な部として認められず、最初は仮部という扱いになっている。この仮部は同好会という名称になり正式な部に比べると予算も圧倒的に少なく、活動するにも色々と厳しいのが実情だ。

部室に機材を揃える余裕もないため、ゴールデンウィーク中は特に動くことができず休みにしていた。

休み明け久々の活動。といっても二人でデジモンについて話したり、部員の持ってきたお菓子を口に運ぶぐらいしかやることがない。それを活動と言えるのか陽太自身もちょっと自信がなかった。

様々な部室が立ち並ぶ部室棟の三階、その一番奥まった部屋の扉を開く陽太。

「お疲れさまでー……」

「ああ、石黒くん。お疲れさま」

扉を開くと、そこには眞白美月がいた。

もう一人の部員、一年生の小緑双葉（こみどりふたば）と机を挟んで、向かい合いながら談笑している。

「え、ええーっ！？ 眞白さん、なななななんで！？」

驚愕の声をあげる陽太。

美月はあの勝負に勝ち、結果色々な件を無かったことにした。それは二人の関係も他人に戻るのだと陽太は解釈していたし、今後部活に誘うつもりもまったくなかった。

だが、何故か眞白美月は部室の中から現れた。

後輩部員の双葉が立ち上がり、陽太に歩み寄ってくる。首周りで丸く短めに切り揃えられたポブカットの髪を揺らし、丸ぶち眼鏡の奥は満面の笑みである。

「ちよっと部長ー。知らなかったっすよ、まさかフロストクインと知り合いだったなんてー」

それならそうと言ってくださいよ、と茶化す双葉に対して、陽太はただただ啞然としている。双葉はそんな反応にハテナマークを浮かべ、涼しい顔をした美月と陽太の顔を交互に見やった。

「え？ え？ なんか訳アリっすか」

事情を呑み込めずキョロキョロする後輩に向けて、コホンと咳払いをしてから美月が説明を始める。

「そうね、話しておこうかしら。……あの日、石黒くんは私を熱く求めてくれたわ」

「そーなんすか！ 部長って結構大胆だったんすね」

大袈裟に、誤解を与えるような伝え方をする美月の言葉を双葉は素直に受け取った。

話がおかしな方向に行くことを察した陽太が、フリーズから解除されて叫ぶ。

「変な言い方しないで！」

否定の言葉にキョトンとする双葉。まさか本当に色恋沙汰だと誤解したわけでもあるまい……と思いつつも、万が一ということもある。陽太はこれまでに積み上げた自分の清廉潔白なイメージを守るべく、順を追って説明し直した。

「眞白さんと同じクラスになってすぐ、僕は彼女がフロストクインだって気づいたんだ。

だから部活に誘ったんだけど」

「振られちゃったんすねー？」

「振られてない！ ……いや、断られたのは確かなんだけど」

わざとなのか、やけに情動的に解釈する双葉の発言にツッコミを入れつつ、改めて陽太は美月へと問いかけた。

「それで、どうして部室に？ あのバトルで僕は負けて、この件はなかったことにするって話だったと思うけど」

そんな疑問に、彼女はあっけらかんと答える。

「そう。リセットしたから、今日はただ興味がある部活の見学に来たわ」

「そ、そんな頓智みたいないな」

先日の一件によって二人の関係はリセットされた。なので、まったく初対面の気になる部活動を見学に来たという体裁で遊びにきた。これが美月の言い分だった。

先日のバトル結果に心の底から落ち込んだ陽太は、そんな感じでもいいのかとがっくり肩を落とす。

しかしこれは再び彼女を勧誘できる千載一遇のチャンスなのか？ どうにも掴みきれない陽太だったが、そんな心の疑問が聞こえているかのように美月は今の立ち振る舞いを説明する。

「一応言っておくけれど。ペンモンの件がある以上、部活への参加は考えられない。そこは変わらないわ」

「えー。眞白っち、部に入ってくれないんすかー？」

残念がる双葉。陽太だけでなく、彼女もまた少数すぎる部の現状に不満がある。同性の部員候補、ましてやフロストクイーンが目の前にいるとなれば、残念がるのも無理のない話だろう。

先輩相手にもうあだ名で呼ぶ仲になっている双葉の距離の詰め方に驚きつつも、もはやツッコむ気力もない陽太であった。

ここで美月は制服のポケットからデジヴァイスを取り出した。今日も元気にペンモンのドット絵が画面内を動き回っている。

「やあ、ペンモン」

「やっほー。アタシに負けた陽太くん！」

「ぐぬぬ」

気さくに挨拶したが、さらっと敗北を強調されて引きつった笑みを浮かべる陽太。

デジモンはゲーム開始時の生体データから生み出される都合上、テイマーの性格に近い個体に育つ場合がほとんどだ。しかし、ペンモンは美月よりも実直な話し方をするなど陽太は思った。

あるいは、美月が未だに本当の性格を隠していて、実は結構毒舌キャラなのか。まだそ

の判断ができるほど美月のことを知らない。

ペンモンの姿を見て、隣にいた双葉も反応した。

「おお、眞白っちは今ペンモンを育ててるんすねー！ ペンモンと言えばやつぱりカーリングとか得意なんじゃないっすか？ 闘技場で高得点を狙うならメタルマメモンじゃなくてペンモンと戦うことになるっすけど！」

「えっと……双葉は何を言っているのかしら」

「あんまり他人のこと言えないけど、スイッチが入ると止まらない人なんだ。気にしないで」

何を言っているのかさっぱり分からない双葉の饒舌トークを軽くいなしながら、陽太は部室の椅子に腰かける。

デジモン部はまだ設立から日が浅く、しかも同好会扱いなので部室には備品もあまり置かれていない。普通の教室にあるものと同じ机と椅子が数組と、仮置きされた本棚が壁に並ぶだけだ。本棚の書籍も陽太と双葉が自宅から持ち出した私物のデジモン関連本ばかりで、部の荷物というわけではない。

本来ならば部員数と同じだけのパソコンとヘッドマウントディスプレイを用意して、この場所からいつでもオンライン接続できるようにしたいのだが、予算が下りない以上そこはどうしようもなかった。

陽太が座ったのを見て、美月も最初に座っていた双葉の対面席へと戻る。二人が座ったことで、一人で盛り上がっていた双葉もいそいそと自分の席へと座り直した。

デジモン部二人の視線が美月に集中する。

本題。何故彼女はデジモン部を訪ねてきたのか。

説明を求められていることを理解し、美月は首肯した。

「部活に参加できないと言った手前、申し訳ないけれど。今日はペンモンの件で知恵を貸してほしいと思って相談に来たの。他にデジモンのこと詳しい知り合いがいなくて」

力になりたいと言った陽太の言葉を信じてくれたのか、デジモン部を頼りにしたいと言  
う。

「もちろん！ 眞白さんの力になれるなんて光栄だよ」

自ら出した助け船だ、陽太に断る理由はない。

双葉も朗らかに答える。

「あたしも同じっす！ 眞白っちとあたしの仲じゃないですか」

「いや、小緑さんと眞白さんは会ったばかりでしょ」

陽太がツッコミを入れつつも、美月へ協力するということで二人の意見は合致した。

美月はクールな表情こそ崩さなかったものの、少しでも少しか表情が柔らかくなったように見えた。彼女としても、先日のバトルで関係をリセットするといった手前このお願いは緊張するものだったのだろう。

その後、双葉への説明も兼ねて美月は現状について再度整理した。

ペンモンを二年間育成して未だに進化の兆しが見えないこと。シヨップでの診断も受けているが、コンデイションは良好でいつでも進化可能な状態であること。そして、美月自身はどうしてもペンモンにこだわりたい理由があり、リセットや別デジモンの育成は考えていないこと。

話を聞きながら、陽太と双葉も細かく質問をしていく。

「それって、端末のバグとかじゃないんすよね？」

「スマートフォンアプリに移し替えたり、オンライン上でも進化を確認したけれど、変わらなかったわ」

デジヴァイス側の不具合ではないようだ。といっても、端末でだけ進化できないという不具合は聞いたことがないので、あくまで可能性の一つとして聞いてみただけだった。

「コンデイションは問題ないってことだったけど、戦績が足りないということは？ 眞白さんはずっとオンラインに参加してなかったんだよね」

「オフラインの対コンピュータ戦はプレイしていて、全戦全勝よ」

デジモンの育成は世話とトレーニングだけでなく、実践の数と勝率も進化条件として絡んでくる。美月は二年間オンラインにログインしていなかったため対戦数がどうなっているのか疑問だったが、一人用モードはきちんと遊んでいるとのこと。

次に陽太は、デジヴァイス内のペンモンへと問いかけた。

「ペンモン自身はどう思う？ 自分が進化できない理由」

何の気なしに出された質問。しかし、聞かれたペンモンは一瞬言い淀む。

「えっ？ ……アタシは、分かんないなあ」

陽太はその反応を見て美月へ視線を移した。やはりと言うべきか、美月の表情が少し曇っている。口止めているということだろう。どうしてもペンモンで戦いたい理由と何か関係するのだろうか。陽太は、彼女が自分から言える時まで理由について深追いしないことにしている。

それからしばらく三人とパートナーデジモンたちは、あれでもないこれでもない議論をした。しかし結局有力な候補はあがらないまま、やがて下校時間が迫ってくる。

よく考えてみれば、美月は公式アドバイザーにも相談しているのだ。それで分からないことを、素人が三人で少し考えたからといって、すぐ正解に辿り着けるほど甘くないだろう。

「流石に分かんないっすねー」

今日は観念したといった調子で双葉が吐き出すと、全員が頷いた。

ペンモンの状態について詳しく調べることができればいいのだが、残念ながらこの部屋でできることは少ない。

ひとまず調査一日目はお開きとなった。

「部活へ勧誘はしないけれど、眞白さんがよければまた遊びに来てよ。一人で悩むより、みんなで考えた方が良い案が浮かぶかもしれないし」

帰り支度をしながら陽太が言う。双葉も同意した。

「そうですよー。この部活、部長と二人でめーっちゃ暇なんで。眞白っちが来てくれるなら大歓迎っす」

「小緑さんはいつも一言余計だなあ」

たじたじになりながら頭を搔く。

そんな二人の様子を見てふっと表情を緩める美月。満面の笑みとはいかないが、こうして話しているとフロストクイーンとして気張っている時よりも柔らかい顔を見せてくれる。陽太はそれが少しだけ嬉しかった。

それぞれに自分の荷物を持ち、部室の扉へと歩き出す。

「こうしてデジモンについて人と話すのは久しぶりだから、なんだか懐かしくなったわ」不意に美月が呟く。陽太は彼女の顔を覗き込んだ。

「昔はデジモン友達だったの？」

部室の扉を開けると眼前に廊下の窓が広がっている。そこから見えるすっかり暗くなった外の景色、そのずっと向こうを美月は見つめていた。

「ええ。……私にデジモンを教えてくれた、大切な友人が」

彼女の視線はすでに見え始めている星空へと向けられている。それを追いかけるように陽太も空を見上げ、それが何を意味するのか少し考える。

そこで双葉が茶々を入れてきた。

「大切な友人って、もしかして恋人っすか？」

「こ、恋人!？」

何故か慌てる陽太。

美月は二人の顔を見てから、含みを持たせるように答えた。

「さあ? どうかしらね」

はぐらかすような答えにますます焦る陽太と、目を輝かせる双葉。

「い、いやいや! 眞白さんって小学生の頃からデジモンやってたし! こここ恋人なんて!」

「なーに言ってるんすか部長。今の小学生は進んでますよー」

「す、進んで!? 何が!？」

三人は他愛もない会話をしながら部室を後にし、この日は解散となった。

○

深い深い霧の中を走っているような感覚。

どれだけ走っても先は見えず、自分が前を向いているのか後ろを向いているのかも分からなくなる。ぬかるんだ地面が足をとり、何度も転びそうになりながら、ただ進んで、進んで、届かない誰かの背中を探す。

ここがどこかは分からない。だが、誰を探しているかだけはハッキリしている。

「待って！ いかないで！」

手を伸ばす。かつて隣にいたはずのあの人に。

「私を一人にしないで！」

必死に叫び続けると、霧の向こうから声が返ってきた。

「ねえ美月。アタシ、バトルしてる美月が好き。キラキラ輝いていて、かっこよくて」

優しい声色で話しかけてくる声。知っている、この会話は……。

「だからね、美月は——」

やがて声は聞こえなくなってしまう。あの時、あの子になんと言われたのか。記憶にかかった霧は濃くなり、視界に砂嵐のようなノイズが走っていく。

「待って、ヒナタ！」

叫びながら、美月は自室のベッドから飛び起きた。額に汗をかき、息を切らしている。

ゆっくりと呼吸を整え、壁掛けの時計を見た。深夜二時過ぎ。まだ目を覚ますには随分早い時間だ。

自分がうなされていたことを理解し、美月は深い溜息をついた。

「美月。またあの夢を見たの？」

デジヴァイスからペンモンが話しかけてくる。美月はベッドのすぐ横に置かれたデジヴァイスを手に取り、画面越しに心配そうな顔をするペンモンに優しく微笑む。画面は小さなドット絵ではないが、感情まで分かるのがデジモンの不思議なところだ。

「ええ……。でも大丈夫よ、ありがとう」

言いながら、先ほどの夢を思い返す美月。

陽太と双葉にも少しだけ伝えた、大切な友人——赤坂ヒナタの話。久々にあの話を口に出したことで、今日はその姿を強く思い浮かべていたのかもしれない。彼女に関することを思い出そうとすると、決まって同じ夢を見る。

すると、唐突にペンモンが問いかけてきた。

「ねえ美月。美月は、アタシと一緒に戦いたい？」

質問の意図が読めず、何をいまさらと返事をする。

「そうよ。ずっとそう言ってるじゃない」

決まり文句のような答え。だが納得できなかったのか、ペンモンはさらに疑問を続けてきた。

「それは自分の意思？ それとも、ヒナタがそう言ったから？」

美月は少しだけ言葉に詰まった。

「……どっちも、よ」

煮え切らない態度で応える美月。ペンモンの質問に対して、自身の中でも明確な答えを持ち合わせていなかったのだ。

普段なら、こうして美月が困った顔をしたタイミングでペンモンも話を終えるのだが、今日は止まらない。

「なら、どうして陽太や双葉にヒナタのことを言わないの？」

「それは……」

美月は言い淀む。

ペンモンのことを二人に相談するならば、本来最初に言わなければいけない事情を美月は隠していた。それはきっと、いざ話してしまえば二人も親身に聞いてくれるだろう話。分かっているのに、美月は言い出す勇気がなかった。

心がざわつく。夢のこともあり、気持ちが悪く落ち着かない。

だからだろうか。美月は独り言に近い声色でペンモンに質問を投げかけていた。

「……ヒナタを殺したのは私だと思う？」

零れた言葉。その発言にペンモンが酷く動揺する。

「な、何を言ってるの美月！」

卑怯な質問だと美月は思った。ヒナタのことは誰にも、どうすることもできなかった。こんな問いかけをしたところで「そんなことない」と優しい言葉を返されるのは分かっている。

そして、美月は慰めを待っているわけではなかった。

「ごめん。忘れて」

言いながら掛け布団を頭まで被り、再び眠る体勢をとる。

何故ペンモンにそんなことを聞いたのだろう。美月は自分の中に残る感情を処理できないまま夜を過ごした。

○

あれから数日。

美月は毎日デジモン部に顔を出し、陽太や双葉と共にペンモンに関する情報を整理していた。

しかし正直に言って事態は進展していない。

「まあ、そりゃそうっすよね。あたし達三人集まって、部室であーでもないこーでもないと言っただけっすから」

「そうズバツと言われると、傷つくなあ」

言いながら、陽太もそのことは理解していた。

この部室には何の機材もない。陽太と双葉はデジモンに関する知識を持ち合わせているが、あくまでもゲームに熱心なユーザーのそれでしかない。シヨップの公式アドバイザーに診断してもらっているペンモンの状態を、素人が話し合ったからといって好転させることは難しかった。

次の手を打たないことには、この状況が変わるはずもない。

「ところで」

手詰まりを感じる中、双葉がふと話し始めた。

「前から思ってたんすけど、眞白っちはデジモンに詳しくないんすか？」

「え？」

突然の質問に戸惑う美月。双葉は自分のスマートフォンを取り出し、デジモンアプリを起動しながら言った。

「たとえば……これ。何モンか分かるっすか」

画面を見せる双葉。そこには、現在彼女が育てているデジモンの姿が映し出されている。淡い緑の体が特徴的な二足歩行の姿。亀の甲羅のようなものを背負っている。頭の上にはお皿……のような形の音楽ディスクが乗っていて、首元にはヘッドフォンがかけられていた。

美月は画面をじっと見つめ、そして何の感慨もなく答えた。

「知らない」

それは浅学を恥じるでもなく、難題に怒るでもなく、本当に自然と出た言葉だった。なんならその顔には「見た目をちょっと見ただけでデジモンの名前など分かるものか」という強い意思表示が込められているようにさえ見える。

すると、そんな美月へスマートフォン越しに抗議の声が届いた。

「オイオイお嬢さん！ 俺様——ガワツパモン様を知らないなんてマジかヨ——！」

双葉のパートナーデジモン、ガワツパモンの声だ。

そのハイテンションな話しぶりに気圧されながら、美月は画面を注視している。そしてまた、しばらくガワツパモンの様子を観察すると

「……え？ これって見ただけで名前分かるものなの？」

心の底から疑問に思ったのだろう、陽太と双葉を見ながら問いかけてきた。

二人は互いに目を見合わせると、どちらからともなく答える。

「ま、まあ。大体は」

「正直、分かるっすよねー」

その返答に、美月は意外そうに目を丸くした。

「そ、そうなのね……」

話をし始めて、陽太は以前ペンモンと初めて対面した時のことを思いだしていた。

あの時、デジヴァイスの画面に映るペンモンのドット絵を見て陽太が名前を言い当てる

と、美月はその知識を流石だと褒め称えた。見ただけで名前が分かることに感心していたのだ。

あの時は美月から褒められたことに上機嫌だった陽太だが、確かにその反応は少し不自然だ。デジモンを遊んでいない一般人なら無理からぬ会話だが、相手は元世界チャンピオン。マニアックな知識を求められたならまだしも、デジモンの基礎情報に理解がないのは珍しいことかもしれない。

これまではどうして来たんだろう？

そんなことを考えていると、双葉がパチンと手を叩いた。

「よし！ 部長、眞白っち！ 今度の週末はデジモンコネクトオンラインに『校外学習』に行きましょう！」

「え、何？」

突然の提案に、陽太が思わず聞き返す。

「校外学習っすよ！ 社会科見学でも遠足でも、言い方はなんでもいいっすけど」

「それでゲームに行くの？」

「ゲーム内には、資料館エリアがあるじゃないっすか！」

そこまで言われてようやく双葉の考えを理解する。

デジモンコネクトオンラインの楽しみ方は様々だ。育成をするもよし、パートナーとコミュニケーションするもよし。ファクションや、複数あるフィールドの景観を楽しむこともできる。

そして、ゲームに関する知識を蓄えることもまたプレイヤーとして与えられた自由の一つ。資料館エリアはデジタルモンスターという生命体に関する説明や、デジモンコネクトオンラインの歴史、ゲームプレイについての攻略や情報に至るまで、その名の通り数々の資料を楽しめる場所になっている。

美月のデジモンに対する知識が乏しいのならば、今出かけるのに最も適したエリアだろう。

「なるほど。部の活動としても申し分ないけど。……交通費とゲーム代は自腹になるよ」  
部長として了承しつつも、改めて部のやりくりに苦い顔をする陽太。どこに行くにも移動は必要で、デジモンコネクトオンラインをショップやアミューズメント施設でプレイするのにはお金がかかる。世知辛い。

「私は部員じゃないから、そこは構わないけれど」

美月も週末に出かけることを自然と受け入れているようだ。二人の同意が得られ、双葉はパチンと手を叩く。

「じゃあ決定っすね」

そして、その後におおざと提案してきた。

「あ、交通費とゲーム代についてなんすけど。あたしは——」

### 3..それぞれの想い

「おーい、眞白さん！」

以前偶然にも顔を合わせたデジモンショップに向かうため、陽太と美月は学校に程近い駅前で待ち合わせをしていた。目的はもちろんオンラインへのアクセス。

予定時刻は昼過ぎ。ゲームに長時間ログインすると食事のタイミングが難しくなるため、各自食べてから集合しようということになっていた。陽太は家で軽く済ませてから余裕をもって辿り着く。

駅前の人はまばらだ。休日なのにこの人の量で大丈夫なのか少しばかり心配になる人口だが、待ち合わせをするには丁度良い。陽太は早めにやってきたつもりだったが、辺りを見回すとそこには既に美月の姿があった。

「眞白さん、はやいね」

「こういう時、人を待たせるのは落ち着かないのよ」

今日の美月は、水色のブラウスシャツに白いロングスカートを着こなしたカジュアルな格好。スタイルの良さもあつて、落ち着いた服装もどこかの御令嬢のような気品を感じる。一方の陽太は、デジモンのイラストが大きく描かれた白のシャツを着て、下は黒いパンツを合わせている。こちらはゲームユーザーということを全面にアピールしていて、二人で並ぶとなんと珍妙な組み合わせになってしまった。

「石黒くんは相変わらずね」

服装を見ながら感想を漏らす。前回ショップで出会った時も、こうしてキャラモノのシャツを着ていたことを思い出していた。

陽太は「まあね」と何故か自慢げに答えると、美月の服装へと視線を向ける。

「眞白さんは……いやあ、なんというか」

照れた様子で言葉を濁す陽太。美月はへの字口になる。

「何その反応。こういうのは実際の程度がどうあれ、女の子を褒めてあげるのが定石でしょう」

とっさに感想が出せなかった彼をからかうように言う美月。陽太は焦った様子でドツと汗をかいた。

「いや、その！ す、すごく似合ってます。はい」

感想が出てこなかったのは、陽太が女性を褒め慣れていないことから来ている。美月もそれを理解しつつからかってみた。

しどろもどろな様子を見てクスリと笑うと

「冗談よ。石黒くんにレディーの扱いは期待してないわ」

たしなめるように言った。

「そ、そんなあ」

こうして、和気藹々とショップに向かって歩き出す二人。

現在この場に双葉はいない。約束を無下にしたわけではなく、彼女は自宅にヘッドマウントディスプレイなどの機材を備えているため、自宅から直接ログインしてオンラインで合流すると言い出したのだ。

交通費もゲーム代も自腹になる以上、無理に合流する必要はまったくない。陽太たちはそれに同意し、結果として二人で待ち合わせすることになった。

しかし。

「あー。あの！ 天気、いい、ね……」

とっさに陽太が空を指差す。雲が多くかかった鼠色の空模様。残念ながらその視界に太陽を見つけることはできなかった。

「夜中から雨だつて天気予報が言つてたわよ」

「そ、そうだよね！」

美月に軽くないなされ、あえなく撃沈。狼狽える陽太。

視線をきよろきよろと彷徨わせて、今度は広告看板を話題に取り上げる。

「そうだ、今度この近くにスイーツのお店ができるんだつて！ 眞白さんは甘い物とか好き？」

「……ねえ石黒くん」

「は、はい！」

懸命に何か話題を見つけようとす陽太の様子に痺れを切らして、美月は告げた。

「なんで緊張してるのか知らないけれど、いつも通りでいいわよ」

「そうよそうよ！ アンタたち、じれつたいわねえ」

彼女の言葉に同意したのは、パートナーデジモンのペンモンだ。ここまでの会話を聞いて、指摘したくてうずうずしていたらしい。

さらに、陽太の相棒であるパラサウモンも同調して声をあげた。

「いやあ、陽太つてここまで奥手だったんだね。僕もビックリしたよ」

「め、面目ないです……」

不甲斐なさを自覚し、しょんぼりと肩を落とす陽太。そんな彼の機微がおかしくて、美月はまた表情を緩める。

そんな彼女の反応に、デジヴァイス越しのペンモンが食いついた。

「美月、陽太といるとよく笑うよね」

「？ そう？」

言われてもピンと来ないという表情で問い返す美月。

「そうよ！ 美月がこんなに伸び伸びやってるの、久々に見たわ」

美月は過去の自分を思い返しながらし考える。

確かに、ここ数年で思いきり笑った記憶はない。クラスに溶け込むための愛想笑いの方が圧倒的に多く、それも美月自身が心の距離を一定に保とうとするので、周囲からは少し近寄りたいたいオーラが出ていたかもしれない。

それが陽太や双葉と出会ってから少し変わった。ペンモンのことを相談するという表向き理由はあるものの、三人は部室でお菓子や飲み物を広げて無為な放課後を楽しむのがほとんどになっている。

まるで。

「……友達、なのかもね」

美月にとって、親しい友人の存在はある種のトラウマになっている。かつては親友と呼べる人もいたが、その人との顛末を思うとどうしても一歩踏み出せない。

そんな中で知り合えた二人は、美月の中でも既に特別なものへと変わっていた。

「眞白さん？」

物思いに耽っていると、陽太が少し心配した顔で声をかけてきた。

「え？ 何？」

「いや、なんか難しい顔してたから。大丈夫？」

どうやら過去を思うと表情が険しくなってしまうらしい。美月はかぶりを振る。

「なんでもないわ」

「そう？ あ、もう着くよ」

言われて周りを確認するとデジモンショップは目の前だった。考え事に集中して、歩いている間は上の空だった。美月は気持ちを切り替える。

「校外学習ね」

陽太も頷く。

「小緑さんが言い出したことだけど、実際これは良い機会だよ。眞白さんは確かにデジモンが強いけれど、たぶんセンスの人だ。これまでは知識のない中で、それでも勝ち上がれる実力があつたんだと思う」

言いながら、陽太の語り口に熱が入る。

「でも、相手の種族や特性を知れば事前に立ち回りを考えることもできるし、もっと動きやすくなると思う。ペンモンの進化も大事だけど、これは眞白さんがもっと強くなれるチャンスだよ」

「なるほどね」

美月は同意した。これまでは確かにパートナーデジモンへの信頼と、自分の勘だけで乗り切ってきた部分がある。デジモンに関する知識は、かつての親友から教えてもらったことがほとんどだった。

ペンモンのことについても、根本のデジモン知識がないのならば思いつく対策も乏しい。

これは現状を打破する一步になるかもしれない。

二人はデジモンショップに来店しゲームスペースへと向かう。休日で混雑はしていたが、数えきれないほどの筐体が並ぶ公式店舗だけあって待ち時間なくオンライン世界へログインできた。

被ったヘッドマウントディスプレイが何度か明滅し、ゲームの世界が鮮明に映し出される。前回のログアウト地点である都市エリアに帰還すると、先に双葉——テイマーネーム《バルルーナ》が待っていた。

「おっ、ようやく来たっすねー」

双葉のアバターは、とんがり帽子にマントを羽織った魔女っ子スタイルだ。現実世界と同じような丸ぶちの眼鏡をかけているところも含めて、統一感のあるコーディネートになっている。

陽太はその姿を確認すると、素直に感想を述べた。

「小緑さん、今は魔女モチーフなんだ」

「そっす！　せーっかく色んな衣装があるんすから、こういうのは楽しまないよ」

双葉はくるりと一回転して服装を見せると、ブイサインをしてニカッと笑った。どうやら彼女は頻繁に衣装を着替えているらしい。

デジモンコネクトオンラインでは実際のファッションブランドが衣装デザインを提供するなど、着せ替え要素も豊富だ。双葉はこの要素を隅々まで楽しむべく、ログインするたびに洋服店や雑貨屋を巡っている。

双葉のコスチュームに言及した陽太に対して、美月がボソッと呟く。

「双葉の服装にはすぐ感想が出るのね」

先ほどの会話もあつてか、少し棘を感じる言い回しだ。

陽太は焦って弁明する。

「え！？　いや、そういうワケじゃ」

「お？　何すかー眞白っち。嫉妬っすか？」

陽太ではなく、美月の発言に対して双葉が触れる。普段なら慌てている陽太を双葉と二人でからかって終わりになる流れだったので、思わぬパスに美月は面食らった。

「わ、私？　なんで私が嫉妬するのよ」

くすくすと笑う双葉。

「いやー、その辺は後で話すっす」

何やら含みを持たせて会話を切り上げる。

そこで、双葉の横にいたデジモンが話しかけてきた。

「おいおいプリティーガール！　そろそろオレっちも紹介してくれよナ！」

「ああ、こっちで会うのは初めてっすよね。改めて、うちの相棒ガワツパモンっす」

亀と河童を併せ持ったような姿の成熟期デジモン、ガワツパモン。アプリの小さな画面

で見るのとは違い、人間よりも一回り大きく少しだけ威圧感がある。頭に乗った皿は音楽ディスクになっていて、そこから流れる音楽を聴いていつも陽気に踊っている。中々に騒々しいキャラクターだ。

ガワツパモンが陽太と美月に挨拶する。

「やあブラザーたち！ リアルでは、うちのキュートガールがいつもお世話になってるぜ！」

キュートガール、というのは双葉のことだろう。

あまりにハイテンションなガワツパモンを見て呆気にとられる美月。ぽかんと口を開けていたが、しばらくしてからまとまりきっていない感想を述べた。

「なんというか。デジモンって本当に色々いるのね」

「この前も話したのに随分テンション低いナ！ 俺様に合わせて踊ってくれヨ、フロストクイーン！」

ノリノリで踊り続けるガワツパモン。その独特な言動を前についていけない美月を見て、双葉は頭を抱える。

「部室であんまりこの子に触れなかった理由が分かったつすか？ コレがいると真面目な会話ができないっす」

「つれないこと言うなよキュートガール！」

「なーにがキュートガールつすか！ 変な名前と呼ぶなって言ってるでしょ、このアホガツパ！」

「ノー！ なんてこと言うんだ、このバカメガネ！」

「いいでしょメガネ！ むしろプラスの属性でしょー！」

二人がほほ同じ温度感で言い合いになっているのを見て、陽太と美月はクスリと笑った。陽太がぼそつと言う。

「ね？ 似てるでしょ、二人」

「確かに」

デジモンはテイマーのデータから生まれる。そんな事象を体現したかのようなやりとりに、美月は微笑ましくなった。

○

三人が訪れた資料館エリアには膨大なデータが蓄積されている。デジモンたちの生態や各種用語についての解説に始まり、デジモンコネクトオンラインの歴史そのものを学ぶこともできる。

といってもゲームがリリースされてからまだ十年も経っていない。発売以前の開発秘話も記載されているとはいえ、ヒストリーと呼ぶにはまだまだ浅い記録だ。そのためか各事

象については事細かにまとめられていて、マニアにはたまらない情報量になっているとも言える。

「あ……私」

資料の中には過去の大会に関するデータも掲載されており、ティマーネーム・アクエリーこと眞白美月の世界大会三連覇も歴史的出来事としてバッチリ解説されている。

優勝した後にも関わらず感心のなさそうな顔でトロフィーを掲げている美月の写真を見ながら、双葉が興奮気味に話す。

「いやー、この超天才ティマーさんが今まさに隣にいるなんて、まだ信じられないっすねー」

「こうして写真を飾られていると、私って有名人みたいね」

どこまでも実感のなさそうな美月の感想に、陽太がツツコミを入れた。

「いやいや！ 眞白さんはゲーム内では本当に有名人なんだから！」

どれだけ言われてもピンと来ない様子の美月。聞いているのか否かも曖昧な「ふーん」という感想を残して、そのまま歴史年表を読み進めていく。

「お、こっちは現チャンピオン様っすね」

双葉が見つけたのは、美月が大会に出なくなってから二連続で優勝を飾っているティマー《ネガ》の資料だ。大学生か社会人と思わしき男性で、柔和な笑顔とは裏腹に攻撃的なスタイルで有名な人物である。黒と金の派手なスーツ姿で、端正な顔立ちからアイドル的人気を誇っているようだ。

目の前にある資料もそこそこに、陽太は自身の知識を交えて彼の解説を始める。

「ネガのバトルはとにかく派手で、爆撃なり何なりで塵一つ残さないようなバトルをするんだ。観客席から見ると見応えがあるんだよね」

相変わらずゲームのことになると眩しいぐらいの笑顔で解説する陽太。口ぶりからして、彼の戦いも実際に観戦したことがあるのだろう。

熱を帯びる陽太の言葉を聞きながら、美月は感想を漏らす。

「派手なバトルねえ。そんなのと戦ったらパートナーのトラウマになりそう」

「確かに。対峙するのは怖いかも」

デジモンたちがバトルで命を取り合うことはない。あくまでもゲーム内の試合として、体力ゲージを削り切るまでが勝負だ。とはいえ、バトル中に受けた傷はきちんと治療しないとデジモンの寿命にも関係してくるので、攻撃的なスタイルというのはそれだけ相手に恐怖を与えることになるだろう。

何より、相棒として愛情を注いだデジモンが完膚なきまで叩きのめされる様を見せられるのは、実際のダメージとは関係なくティマーの精神に悪い。実際、ネガに負けたことで競技シーンから降りた人もいるという噂だ。

こうして大会の歴史を見終えた一行は、今度はデジモンたちの解説が見られるブースへ

と向かう。それぞれのパートナーデジモンに関する資料を全員で閲覧することになった。

美月がペンモンの資料を開く。当然、進化しないペンモンという特殊な事例は確認できなかったが、こうした情報を見る機会がなかった美月にとってはどれも新鮮な内容だった。横で同じデータを見ていた陽太が話しかける。

「眞白さんって、ペンモンの前はブルコモンをヘクセブラウモンまで育て上げたんだよね？」

「そうね。あの子はペンモンと違って、大人しくて育てやすかったわ」

「ちよつと！ それじゃアタシが育てにくいみたいじゃない！」

美月が過去を懐かしむようにいうと、ペンモンがやんやと意見した。

ブルコモンは氷の属性を持つ小竜型デジモンだ。力持ちだが穏やかな性格で、生き物の少ない極寒の地で育つ種族だからか他のデジモンに対する仲間意識が強く、優しい心の持ち主である。

美月はそんなブルコモンを、最終的に究極体のヘクセブラウモンへと育て上げた。氷の性質はそのままに魔法騎士へと進化したヘクセブラウモンは、美月の指示も相まってバトルでは踊るように華麗で、見るものを魅了した。

陽太はペンモンの生態説明文を指差しながら言う。

「ほらここ。ペンモンは氷の地域に生息していて、ブルコモンとはとても仲が良い、親友とも言えるべきデジモンなんだって。眞白さんがその両方を育成してるのも面白いよね」

何気なく言われたその発言に、美月は少しだけ動揺の色を見せる。

「親友……」

言葉を詰まらせる。その反応に陽太は少し驚いたが、何かを察して優しい口調で言った。「眞白さん。心の整理がつくまで、無理はしなくていいと思うよ」

こういう時に陽太はすごく気配りができる。服装を褒める言葉は出ない癖にと美月は心の中でツツコむと、少しおかしくなって笑みが零れた。

その後、ひと通りブースを鑑賞し終えた一同は資料館を後にして外に出る。デジモンについての見聞は広がったが、やはり美月とペンモンに関する進展は得られた気がしない。今回の目的はあくまで美月にデジモンの知識をつけてもらうというものだったので、ペンモンの謎は先延ばしにするしかなさそうだ。

するとここで突然、双葉が美月の腕を掴んだ。

「そうだ部長！ ちよつと眞白っちとやることを思いましたので、しばらく待っていてください！」

「え？ 小緑さん、どうしたの」

「いいからいいから！ すぐ戻るっすー！」

「何、双葉。やることって？」

陽太が疑問を挟む余地もなく、というより美月自身も心当たりがない反応だったが、双

葉は彼女を引っぱりながらぐいぐいと離れていく。

パートナーデジモンたちと共に取り残される陽太。二人の背中をポツンと見送る。

「……行っちゃった」

○

二人は陽太たちから見えない資料館エリアの外れまで移動すると、ようやく停止した。

「ちよつと双葉？ 急にどうしたのよ」

自然公園ともいうべき大きな広場。双葉は空いているベンチに腰かけると、突然連れ出されたことに戸惑う美月へ手招きをする。

美月もそれに従って隣に座る。エリアの端で他に何もない場所だけあって、休日でも人は少なく周りの目を気にすることもない。双葉はいつもよりやや落ち着いたトーンで問いかけてきた。

「眞白っち。部長——石黒先輩のこと、どう思ってるっすか？」

「は、はい？」

予想だにしない質問に戸惑う。その反応に双葉はクスクスと笑った。

「眞白っちってバトルの時はクールなのに、普段は顔に出やすいっすよねー」

指摘されて、美月は顔が火照るのを感じる。自分の癖を指摘されたことが恥ずかしいのか、陽太を思い浮かべて感情が揺れ動いたのか、自分でもよく分からなかった。

双葉は空を見上げながら言う。

「部長は良い人っすよ。異性としては、ちよつと頼りないっすけど」

その言葉に、今朝の焦る陽太を思い出して美月も笑った。

「同感」

陽太が美月のために奮闘してくれているありがたさはよく分かっている。先ほどの資料館での会話も、ずっと気になっているであろう事なのに「心の整理がつくまで無理はしなくてもいい」と即座に言える人は早々いないだろう。

だから、だ。

「石黒くんも、双葉もそう。すごく良い人」

「お、あたしもっすか。嬉しいっすねー」

褒められたことがくすぐったくて、照れるように笑う双葉。

しかし、美月は少し意外な言葉を続ける。

「それが……恐いの」

「？ 怖い？」

双葉は思わず聞き返した。

「人の優しさって、誰かを許すことができる強さだと思うの。でも場合によっては、本当

に責められるべき人が、反省する時間もないまま許されてしまうことだってある」

視線を宙に浮かべて、何かを思い出すようにしながら美月が言う。その言葉は双葉に向けてではなく、自分自身への叱責のようだった。

流石に、一度聞いただけで理解できる内容ではない。何を反省しなくてはいけないか、何に許されたのか。疑問に思いながらも、双葉はこれまでの付き合いの中で得られた単語と想像を繋ぎ合わせ、核心をついた言葉を投げかける。

「それが、ペンモンの元テイマーに關係してるんすか？」

ドクン、と美月の心臓が跳ねる。隣にいる双葉にも聞こえるのではないかという大きな鼓動だった。

双葉にそのことを話したことはない。というより今もまだ伝えるべきか悩んでいる。それなのに言い当てられてしまった。

「ど、どうしてそれを……！」

驚く美月とは対照的に、双葉はあっけらかんと答えた。

「だって、ペンモンと眞白っちの性格は全然違うっすからねー。この一週間ぐらい毎日会ってたんで、あの子が他人のデジモンなんだろうなっていうのは分かったっすよ」

デジモンはテイマー本人のデータを参照して誕生する都合上、どうしても似た種族や性格の個体生まれやすい。そのため色々なデジモンを育てたい時など、デジモンの所有権を移動するのは不思議なことではない。デジモンコネクトオンラインの基本的なシステムとして、デジモンの交換や譲渡は認められた行為だ。

他人に遠慮して言葉を濁しがちな美月と、ズバツと物を言うペンモン。一緒に過ごせば性格の違いは明白。そうなれば答えに辿り着くのは容易なことだった。

少しとはいえ、ペンモンの秘密を言い当てられたことで狼狽える美月。

そこに双葉はさらなる衝撃を与える。

「あ、多分ですけど。部長も気づいてるっすよ」

「そうなの……！」

「そりゃあ、あたしより眞白っちのこと見てるっすからね。でも、眞白っちが自分から言い出すまで、きつと部長は追及してこないっす」

今まで隠してきただけに陽太も気づいているというのはにわかには信じがたい話だが、分かっているも聞いてこないという部分は陽太の性格を鑑みれば想像に難くない。

「どうっすか？ こんなに勘の鋭い双葉ちゃんに、ペンモンのこととか色々教えてくれる気になったっすか？」

双葉が美月の顔を覗き込む。吸い込まれそうなほど純粋で穏やかな双葉の瞳。そのままその優しさに絆されて、すべてを吐き出せれば楽になれる。

分かっているものの、最後の一步が踏み出せない。美月は双葉から目を逸らした。

「……それは」

「もー！ 強情っすねー」

強情ではない、ただ臆病なだけだった。美月の心が少し痛む。この数日だけでも友人として信頼感を持っている双葉と陽太に対して、それでも過去を曝け出すことに躊躇してしまふ、ただ弱虫な自分に嫌気が差す。

といっても、美月が言い出せないことは双葉も察していた。

「でもいいっす。それは、あたしより先に部長に話してあげてください」

代わりに、と双葉は別の話題を切り出す。

「今回は、あたしの身の上話を聞いて欲しいっす」

「双葉の？」

きよとんとする美月。突然自分への質問が終わり、話が大きく変わったので困惑する。

美月の表情をチラリと確認してから、双葉は話し始めた。

今から三年前。双葉が中学生になったばかりの頃だ。

彼女は思ったことを素直に話す性格だった。その行為によってどのような結果がもたらされるとしても、自分の考えはきっちり伝えるのが大事だというポリシーをもって発言する。そうすることが正しいことだと疑わなかった。そこは今でも大きく変わらない。

当時、双葉はクラスメイトに包み隠さず何かを伝えた。今となってはそれが何の話だったのかすら曖昧だが、相手の癪に障る話だったのだろう。クラスメイトを傷つけ、それが原因で彼女は――クラスの輪から弾き出された。

教室では、誰も双葉の言葉を聞かなくなった。

持ち物を紛失したり、教科書やノートに知らない落書きが増えた。

直接的な暴力はなかったが、それゆえに誰に気づかれることもなく環境は悪化するばかり。一ヶ月、二ヶ月と、心に棘が食い込んでいく感覚。

やがて彼女の心は擦りきれ、静かに、壊れてしまった。

双葉は学校に行かなくなった。

それどころか、自室の扉を越えて家の廊下に出るのも億劫になった。

「そんな時っす。デジモンコネクトオンラインの存在を知ったのは」

あまり口を利かなくなった親にねだって、家庭用のヘッドマウントディスプレイを買ってもらった。それから自室に籠る頻度はさらに増えたが、双葉にとっては転機と言える出来事だった。

完全なフルダイブ型のオンラインゲーム。外に出なくなった双葉が唯一“景色”を見られる場所。

そして自分を理解してくれる心の映し鏡、パートナーデジモンが隣にいる場所。

気づけばそこが彼女の居場所になった。

「双葉……。あなたは」

語り始めた彼女の過去に美月は言葉を失う。抱えているものの大きさに、美月の方がやられてしまいそうになる。

だがそんな美月の反応とは対照的に、双葉は穏やかに笑っていた。

「デジモンの世界は、本当に楽しかったんすよ」

気づけばゲーム内の交流コミュニティを通じて、たくさん話し仲間ができていた。学校という狭い世界しか知らなかった幼い少女は、外に知らない世界が広がっていて、そこに色々な人がいることを教えられたのだ。

仕事に疲れてゲームに癒しを求める人もいれば、恋人と仲睦まじくプレイしている人もいる。昔からこのゲームの熱狂的ファンだという人も、双葉と同じように最近ゲームを始めた人も、当たり前のように一緒に話している。

そこに国籍も性別もない。それどころか、自分のパートナーや他のデジモンたちとも、種族を越えて仲良くなれる。

双葉は現実にはない充足感を得た。

「デジモンの世界が無かったら、正直……今こうして生きてたか分かんないっす」

語る双葉の瞳が少しだけ潤む。それが零れないように、資料館エリアの上に広がる澄み切った青空を見上げた。

「あたしは、この世界が好きなんすよ」

返す言葉もなく黙り込む美月。

双葉はさらに話を続けた。

心に余裕が出来はじめた双葉は、家庭内で中学勉強を再開した。もとの学校に復学する気にはなれなかったが、高校受験を頑張つて、進学と共に学業へ復帰することを目標とした。

ゲームコミュニティに教師をしている友達がいる、勉強を教えてもらったこともある。

同い年の学生がいて、夜な夜な受験勉強を励まし合ったこともあった。

三年。双葉はとても濃い時間をデジモンコネクトオンラインで過ごした。

「あとは知ってのとおりっすね。今の高校に受かって、あたしは色々変わったっす。高校デビューっすね」

右手でピースしながら、双葉は美月に向けてはにかむ。瞳の奥はまだ潤んだままだったが、彼女はとても力強い表情をしていた。

美月は上手く言葉をかけられない。

「引きこもりになった時、あたしは自分が世界で一番不幸なんだと思ってたっす。でもゲーム内で色んな境遇の人に出会って、現実にはもともとと、人の色んな感情があるんだって分かったんすよ」

「双葉」

ようやく絞り出したのは彼女の名前だけだった。気の利いた台詞を伝えることもできな

いが、言葉の代わりに双葉をぎゅっと抱きしめる。

その行動には流石に驚いた双葉だったが、彼女も静かに美月の背中へ手を回した。

「それですね。うちの学校にデジモン部ができて、部長に出会って……ある時、この話をしたんすよ」

言いながら、二人が体を離す。先ほどまで涙目になっていた双葉は、今はまた穏やかな顔に戻っている。

「そっか。石黒くんも知ってるのね」

陽太と双葉はデジモン部ではじめて出会ったという。この四月からの関係なので、美月と陽太の付き合いとさほど変わらない。たった半月程度の間にもそうした深い事情を話せるほど心を開かせたのは、石黒陽太という人柄が成せる技なのだろう。

今こうして双葉が話してくれたということは、美月もまた短期間で信用を得た証左となっているのだが、彼女自身はそれに気づかない。

「そしたら部長、話の途中からワンワン泣き始めて。もう大変だったすよー」

双葉がその時のことを思い出してケラケラと笑い、美月もそれにつられて微笑んだ。想像に容易い光景だ。

「そういう人なんすよ。部長は」

「うん……分かる」

双葉が美月の両肩に手を置いて、ぐいっと正面に向き合った。真剣な眼差しで美月を見つめる。また純粹な瞳に吸い込まれそうになる。

「眞白っちは、デジモン好きっすか？」

「デジモンが、好き……？」

考えたこともなかったが、問われるとまだ胸を張って好きとは言えない。それは美月自身が背負った過去がそうさせるものであり、このゲームを始めたきっかけそのものにも関わることだ。

即答できなかった美月に、双葉は優しく語りかける。

「眞白っちの過去がどんなものかは分かんないっす。許されることが恐いっていう気持ちも、正直ピンと来ないんすけど」

これまでにないほど強く、しっかりと話す双葉。

「でも部長は、全部分かった上で、正しい答えを見つけてくれるはずっす」

その言葉が美月に刺さる。

本当は分かっているのだ。美月がどんな話をしたとしても、彼はきつと力になってくれようとする。頼ってもいい人なのだ。

未だ複雑な表情で悩んでいる美月を見て、双葉は不意に悪い笑みを浮かべた。

「今、オフの方では二人で一緒にいるんすよね？ この後にも、話す時間をちゃんと作ってくださいよ」

「こ、このあと？」

「そりやそうっすよー！ あたしが何のために自宅からログインしたと思ってるんすか」  
まさか、ログアウト後を二人つきりにするためだったのか。そこまで計算していた双葉の行動に美月は茫然とする。

最後に、親指を立ててグッドサインを出しながら双葉は付け足した。

「なんなら、チューぐらいしてもいいっすよ」

「しないわよ！」

○

「……遅いなあ」

美月と双葉が突然いなくなった後。陽太とパートナーデジモンたちはその場から動くわけにもいかず、ただ立ち尽くしていた。資料館を出入りする他のユーザーたちが、複数のデジモンと共に佇む陽太の様子を怪訝そうに一瞥していく。

「いやあ、うちのキュートガールが申し訳ねえナー！」

やたら明朗快活に謝罪してくるガワツパモン。言葉に反してまったく申し訳なく思っちなさそうな声色に苦笑しながら、陽太は二人が去っていった方向をじーっと見つめている。パラサウモンが欠伸をしながら呟く。

「陽太。せっかくのタイミングだし、ペンモンに色々確認しておかない？」

「確かに」

陽太は頷いた。これまでも美月たちに話を聞く機会があったが、ペンモンとだけ会話するチャンスは中々訪れないだろう。美月がいる場面ではペンモンも何かを隠している様子だったため、色々と探るなら今しかない。

陽太とパラサウモンが同時に視線を向けると、ペンモンは焦るように言った。

「み、美月が言いたくないことは、アタシからも聞けないからね！」

「もちろん、重要なことは眞白さんから聞くけれど……」

何から聞こうかと腕を組んで考え始めた陽太は、最初からアクセル全開で踏み込んだ。

「ペンモンって、誰のパートナーデジモンだったの？」

「うえっ!？」

素っ頓狂な声をあげるペンモン。

「ナニ言ッテルンデスカ。アタシハ美月ノパートナーデスヨ」

「やっぱり別の人のデジモンなんだね」

「か、かまをかけたわね!？」

陽太もまた、美月とペンモンの性格を見比べて関係性を推理していた。たった今の反応を見るに、その予測はほぼ当たっていたとみて間違いないだろう。

とはいえ、ペンモンが隠そうとしているならば美月も言いたくないことに違いない。これ以上ペンモンを追及しても口を割らないだろうし、何より相手が自主的に言い出さない限りは無理に問い質さないのが陽太のやり方だ。

切り替えて、次の話題を投げかける。

「ペンモンが進化しないことについて、僕はいくつか考えがあった」

「へ？ それって？」

「まず、真白さんとペンモンが後からパートナー関係を結んだのなら、単純に相性の不一致という可能性かな」

デジモンはテイマーと一心同体と言ってもいい存在だ。テイマーのデータから生み出されるデジモンにとって相棒は絶対的なもの。ゲーム上はトレードや譲渡というシステムがあるものの、自分自身から生み出されたパートナーの方が他人のデジモンより相性が良いのも当然と言える。

だが、ペンモンは力強く否定した。

「アタシと美月は最高のパートナーよ！ 相性も良いわ！」

えっへんと仁王立ちする姿を見て、陽太も首肯する。

「僕らも戦って、見せつけられたからね。二人は固い絆で結ばれてると思う」

「そうだね。僕と陽太があれだけ頑張って負けたんだから、大したものさ」

パラサウモンも一緒になって、対戦時の感触を伝えた。褒められたことでペンモンは我慢げだ。

一つ目の可能性を話し終えたので、陽太は指を二本、ピースのように立てた。

「だから、二つ目の可能性。真白さんかペンモン、どちらかが進化を拒んでいるとか」

「進化を拒む？ なんて？」

疑問の声をあげるペンモン。この反応が出た時点で彼女にその意思はないことが伺えだが、ひとまず陽太は続ける。

「デジモンは進化すると姿形が大きく変わるけれど、種族によっては性格が好戦的になったり、逆に臆病になったりする。二人の絆は変わらないかもしれないけれど、どんな環境でも変化するので不安になるからね」

そう言う陽太に、ガワツパモンが同意した。

「良い着眼点だぜ部長さん！ まあ変化つても悪かねえけどナ、うちのキュートガールだって、一皮むけて進化したぜ？」

相変わらず大声で話すガワツパモン。

陽太は双葉の生い立ちを聞いている。彼女が家に籠っていた頃、そばにいたパートナーのカメモンは大人しく臆病なデジモンだった。その後、彼女が殻を破り成長したのに合わせるように、カメモンも陽気なガワツパモンへと進化したらしい。

そんなところまで似てしまうのがパートナーということなのだろう。

「ペンモンは、進化したい？」

陽太が問いかける。ペンモンは少しだけ悩む素振りをしたが、すぐ顔をパッと明るくして答えた。

「美月を守る力になるなら、アタシはどんなことだって大歓迎よ！」

どこまでも純粹でまっすぐな顔をしている。その眼差しをしっかりと受け取って、陽太はさらに状況を整理する。

ペンモンは自分が進化することを不安に思っていない。それどころか、相棒である眞白美月のためならばすぐにでもその力を振るうつもりだ。元々は他の人物のパートナーだったのかもしれないが、ペンモンが美月を思う気持ちには一点の曇りもない。

ならば、進化を拒んでいるのは――。

と、今度はペンモンから声をかけてきた。少し遠慮がちに、しかしはっきりとした口調で伝えてくる。

「あのね陽太。もし、美月が過去のことを話す決心したら。……ちゃんと全てを受け止めてほしいの」

「？ 勿論、そのつもりだけど」

思わぬお願いに、意図が読めずに疑問符を浮かべたまま返答する。

上手く伝わっていないことを察してか、ペンモンはさらに続ける。

「美月の悩みはね、他の人が聞くとなんて事ないような話かもしれない。そんなの気にしなくていいよって答えて終わる人もいるかも」

自分の悩みが、他人にとってなんてことない問題だということは往々にしてある。美月の悩みもそうしたことなのだろうか。陽太は改めて考える。

「でも、そんな投げやりな言葉じゃ美月には響かない。だから、ちゃんとすべてを受け止めて、答えてあげてほしい」

肯定や同調ではなく美月の悩みをすべて受け止めて、その上で適切な答えを出す。そんなことができるだろうか。

少しだけ呑み込むのに時間がかかったが、陽太の覚悟は決まっていた。

「絶対に、約束する」

そう言ったところで、美月と双葉が連れ立って帰ってきた。元気に手を振る双葉と、その隣で何やら神秘的な顔をしている美月の顔を交互に見やる。

「おまたせしましたー！」

明るくいつもどおりな双葉の方に向いて、陽太が問いかける。

「何してたのさ」

すると彼女は、チツチツチツと人差し指を左右に振った。

「乙女の秘密っすよ？ 部長には教えられないです」

「何それ」

「まあ、あえていうなら、眞白っちと熱い抱擁を交わしたっす」

「え！？ ど、どういうこと？」

双葉の端折りすぎた説明に驚いて質問ボットと化す陽太。詳細を確認しようと美月の方へ視線を向けると、意味深な笑顔を見せながら彼女も平然と言ったのけた。

「ええ。双葉の温度が伝わってきて、とても柔らかかったわ」

「抱擁の感想なんていらないよ！」

陽太がツッコむと、二人はクスクスと笑った。

何をしていたのかはさっぱり分からなかったが、資料館を出た時の美月はあまり元気ではなかった。ペンモンとブルコモンの種族に親友という繋がりがあることを知ってから、だろうか。

それが双葉と一緒にいることで少しでも和らいだのなら、陽太的にも安心だ。

「まあいつか。それじゃ、そろそろ今日は——」

予定を終えて、陽太が解散の号令を出そうかと思っただけの時。三人に対して後方から声をかけてきた人物がいた。

「失礼。少しよろしいですか」

声の方に振り返る一同。その姿を見て、陽太が叫んだ。

「ええっ！？ 現チャンピオンのネガ！？」

そこにいたのは、柔らかい笑みを浮かべる青年。黒地に金のライン装飾が施されたゴージャスな印象のスーツに身を包んでいる。美月が大会に出場しなくなった後、デジモンコネクトオンラインの世界大会を二年連続で優勝している現在の王者——テイマーネーム《ネガ》その人だった。

「あ、さっき資料館で見た人」

学んだとはいえ、特に感慨もなく美月が反応する。相手も有名人と言える存在だが、自身の知名度にすら頓着のなかった美月に興味を持つという方が難しい。

そんな美月にグイッと近づいて、ネガは彼女の顔をまじまじと見つめた。

「フロストクイーン……いえ、アクエリー。復帰されたという噂は本当でしたか」

「え？ ああ。ああ。どうも」

急な遭遇に困惑の表情を浮かべる美月。

しかし、そんなネガの顔を見ることがあるような気がして記憶を探る。先ほどの資料館で見たデータだけだっただろうか。

考え事でボーツとしている美月に代わり、距離の近すぎるネガとの間に双葉が割って入った。

「で？ そんなチャンピオン様が、うちの姫様になんか用つかー？」

睨みつけるように伝える双葉。柔和な笑みを浮かべる表情の裏で何を考えているのか分からないネガに底知れなさを感じて、無意識のうちに臨戦態勢をとる。

敵対の意思を見せる双葉に対してもあくまで優しい声色で話しかけてくるネガ。

「いや失敬。確かに、目的から話すべきでしたね」

言いながら彼は軽く会釈すると、改めて美月の方を見つめて話し始める。

「前優勝者である貴女にお願いがあり、こうして馳せ参じた次第です」

紳士的な態度で深々とお辞儀をするネガ。見事な所作だが、形が出来すぎていてどこか嘘くさく見えると、隣で見っていた陽太も何となく感じていた。双葉ほど直接的な敵意は露わにしないものの、少しだけ警戒の感情が芽生えている。

陽太が視線を向けると、美月も怪訝な表情でネガに壁を作っており、双葉は完全に威嚇していた。テイマーの機微に気づいたデジモンたちも、それぞれの相棒を守るように一歩前に立ち塞がる。

構える一同を気にすることもなく、ネガは用意していたと思われる話をそのまま口にした。

「是非、私と交流試合をしていただきたいのです」

「……交流試合？」

突然の提案を受けて、美月の眉間に皺が寄った。

「麗しきフロストクインの復活。今はまだ一部のネットワークで噂になっているに過ぎませんが、これは大々的に取り扱うべき事項です。そこで、私と貴女の対戦を事前より告知して周知する。華々しい晴れ舞台で復帰戦を執り行うのです」

「そんなことして、あなたに何の得が？」

説明を受けてもいまいち不明瞭な内容に、美月が懐疑的な目を向ける。

ふっと息を吐いて、ネガは用件を続ける。

「私は貴女と戦えればそれで充分です。そして、せっかくチャンピオン同士がバトルするとなれば、これはイベントとして宣伝すべき事案かと思ひまして」

どこまでも先が見えない会話だ。美月は痺れを切らして宣言する。

「申し訳ないけれど。復帰を大々的にするつもりはないし、あなたとのバトルも今は遠慮させてもらおう」

拒絶。その返事にネガは少しだけ表情を険しくした。

「ほう？ それは、パートナーデジモンが成長期だからですか？」

「そんなところよ」

答えるつもりのない美月。相手がこちらのパートナーを把握していることに少し引っかけたが、すぐ隣にペンモンがいるので推測は成り立つだろう。

だが、つれない返事をした美月にネガが鋭い発言を飛ばす。

「それとも。——あなたがお友達を殺した大罪人だからですか？」

「なっ！」

美月が目を見開く。口の中が渴いて、一瞬で汗が吹き出した。頭から血がさっと引いて

いくような感覚に支配されて足元がおぼつかなくなる。

隣で聞いていた陽太と双葉にも緊張が走り、思わず視線が美月に集中した。

あなたが、殺した？

美月が焦りながら叫ぶ。

「あなた、私のことを調べたの!？」

「盤外戦術ですよ。相手がどんなデジモンを使うのか。どんな戦略を好むのか。どういった経歴の持ち主か。時には、他人の過去やトラウマについて情報を得たりもします」

美月は歯を食いしばって何とか耐えていた。それでもぐらりと視界が歪み、思わず視線を下に落とす。

陽太や双葉がまだ聞いていない彼女の過去について、目の前の男は調べ上げている可能性が高い。

ここで、静かに話を聞いていた陽太が怒りを露わにした。

「僕は、ネガさんも憧れのチャンピオンだと思っていました。強くて格好いいティーマーだと。でもこんな！ 人の弱みにつけこむようなやり方は！」

拳を握り、鋭く相手を睨みつける。普段喧嘩をするようなタイプではないため、啖呵を切りながらも体は恐怖に震えていたが、苛立ちを抑えられなかった。

しかし、目の前で怒る少年を一瞥してネガは冷たく答える。

「君には聞いていないよ。……引っ込んでいろ」

一段トーンを落とした声で威圧するネガ。だが陽太も引かない。

「誰に話しているかじゃない！ 手段が卑怯だって言ってるんだ！」

感情を爆発させる陽太。食い下がってきた彼にネガも少したじろぎ、美月や双葉もいつもと違う彼の憤りに少し驚いた。

ネガは再び美月に視線を合わせ、要件を口早に伝える。

「あなたのパートナーはまだ成長期。ですので一週間の猶予を与えます。来週の十二時までにきちんとパートナーを育てて都市エリアのスタジアムに来てください。……進化すれば、ですが」

ペンモンの事情も知っているような口ぶりで言い放つ。あまりにも一方的な要求に、双葉も口を開いた。

「そんなの、受ける必要ないっすよ！」

「私は試合を事前に周知し、あなたが来ないのならば敵前逃亡を宣言するだけです。……ああ。持っている秘密について話すぐらいのサービスは、集まったお客様にするかもしれませんが」

平然と言い放つネガ。

脅しだ。来なければ秘密をばらすという。

それだけ一方的に伝えて、ネガはその場を後にした。ログアウトと共にその姿がパッと

消える。

ネガがいなくなった後、緊張の糸が解けて陽太と双葉はへたり込む。力が抜けたとはいえ、高圧的なネガに怒り心頭だ。

「なんなんすかアイツは！ 信じられないっす！」

「僕も、あんな人だとは思わなかった……！ 人の秘密を調べて脅すなんて」  
むかむかとした二人の愚痴に挟まれながらも、美月だけは黙り込んでいる。

そんな様子を心配して、彼らは美月に声をかけた。

「眞白さん、この勝負は受けない方がいい。あれでも相手はチャンピオンだ、究極体のデジモンを繰り出してくるはず。今のペンモンでは、流石に戦略で覆すのも難しい」

「そもそも、あんな勝手な言い分を聞く必要ないっすよ。なんすか、眞白っちが人を殺したって！ 意味不明っす！」

二人の言葉を聞きながらも、美月は口を開かない。

眞白美月が友達を殺した。

言葉どおりの意味だとは到底思えないが、そう言われて返せなくなるような過去が美月にあることは見てとれる。彼女の反応を見て、どんな過去が隠されているのか、それに踏み込んでいいのか再び陽太は考える。

いや、事実や内容で決めるのではない。先ほどペンモンと約束したばかりだ、受け止めて答えを見つけれ。陽太の覚悟は変わらなかった。

「私、は……」

ぼそりと呟く美月。

顔を伏せたまま、彼女はスッとログアウトボタンを押した。美月とペンモンの姿が一瞬でその場から消える。

「待って、眞白さん！」

陽太が呼び留めようとしたが遅かった。あまりにも迅速に行われた行動を見て呆気にとられていると、双葉が慌てて叫ぶ。

「部長！ 何やってんすか、追いかけてください！」

「わ、分かった！」

ログアウトすれば、二人ともまだデジモンショップの中だ。追いかけるのは陽太しかいない。

急かされるまま急いでログアウトを実行した。

○

天気予報では夜中から降りだすと言っていたはずの雨が、既に街を暗く濁していた。

陽太が常備していた小さな折り畳み傘に二人で入り、身を寄せる。小さな傘のせいで外

側にはみ出た二人の肩はずぶ濡れになり、二人はさらに距離を縮めた。

密着する体を意識したり、緊張したりするシチュエーションなのかもしれない。しかし美月はもちろん、陽太にとってもその余裕はなかった。

言葉もなく歩く。

今朝待ち合わせをした駅前を越えて、陽太が普段帰る道とは別の、美月の家があるという方向へと進んでいく。駅は昼間と違い人も多かったが、少し細い路地に入ると辺りには誰もいなくなってしまった。静かな喧噪が、より二人の不安を煽り立てる。

意気消沈の美月と、そんな美月にかける言葉もない陽太。それでも彼女を家まで届けるまで目を離すわけにはいかない。今の美月を一人にする薄情な真似はできない。

先ほどのネガの言葉が、頭の中で響き渡る。

「あなたがお友達を殺した大罪人だからですか」

どういう意味だろう。陽太は再び考える。

相手が嘘をついているわけではない。それは美月の反応から明らかだった。しかし言葉どおりの犯罪行為なのだとしたら、くだらない脅しではなく警察にでもなんでも突き出せばいい。

ならば、間接的に美月が関わった事件があったのだろうか。

思いを巡らせる中で、双葉の過去が頭をよぎった。学校で爪弾きにされた双葉は居場所と生きる希望を見失ってしまった。その後、彼女はデジモンコネクトオンラインに出会い、時間をかけて前を向く決心をした。

たとえば同じような人間関係の齟齬があつて、美月が加害者側なのだとしたら。誰かを迫害し、相手は思い悩んだ結果立ち直ることができずに……。

考えてみるも、陽太の中で加害者となつている美月をうまく想像できなかった。彼女は確かに冷静沈着で、ゲーム内でも冷たく見られがちだ。しかし小学生時代からひたむきに大会で戦う姿と、その瞳に秘めた熱さを陽太は知っている。勿論それは彼女が見せる姿のごく一部ではあるものの、私生活でそうした行き違いがあつたとは思えない。

——そう信じたい、と言つてもいいのかもしれない。

他にはどんな事象が考えられるのか。可能性はいくつでもある気がするが、少なくともネガの言ったことは美月の隠し続けている過去と無関係ではないだろう。

ならば聞かなくてはならない。

亡くなった友達がいるのは事実なのだろうか。だとすれば、その友達というのがペンモンの——。

「……着いた」

美月が呟いて、考え込んでいた陽太も顔をあげた。

可愛らしい煉瓦調の装飾が施された一軒家。表札に眞白の文字が刻まれている。立派な門が構えられており、その向こうに少しだけ庭と石畳の道が続いて、玄関扉はその向こう

だった。

「ここで別れたら結局濡れちゃうから、ドアの前まで行ってもいいかな」

陽太が傘を少し動かしてアピールすると、俯いたままの美月が小さく頷く。

二人で門をくぐり、庭の真ん中に敷かれた少しの道を歩く。扉の前までやってきてから美月は靴を探り、鍵を取り出して玄関扉を開いた。

屋根の下に来たため陽太も一度傘を閉じる。無事家まで送り届けたためこれ以上長居をする必要はないが、未だ優れない表情の美月を見て思わず問いかけた。

「本当に大丈夫？」

「……うん。ありがとう」

絞り出すような静かな声で、美月はなんとか送ってもらったお礼を伝える。

「じゃあ、また月曜日に」

とても一人にはしておけない雰囲気だが、あとは家の人になんとかしてもらおう。家の電気はついていたので家族の誰かしらは帰宅されているはずだと陽太は予想し、踵を返して再び傘を開こうとする。

と、不意に後ろから袖口を握られた。陽太は動きを止める。

「ま、眞白さん？」

振り返ると、彼女の目から涙が零れていた。

「ごめんなさい……」

言いながら、一歩近づいて陽太の胸に顔を埋める美月。

「もう少しだけ、一緒にいて」

雨脚の強まる音だけが、開かれた扉から玄関に響き続けていた。

○

美月の部屋。青いラグが敷かれた床に陽太は座っていた。白い小さなテーブルには彼女の母親が持ってきた烏龍茶入りのマグカップが置かれている。他に見えるのはモノトーン調の収納棚と、真っ白なシーツが敷かれたベッド。綺麗に片付いた部屋だが、全体的に物が少ないなと陽太は感じた。

流石に同級生の、異性の部屋は落ち着かない。ましてやそれが眞白美月の自室なのだから尚更だ。陽太はそわそわとしながら、これも美月の母親に渡されたバスタオルを使って濡れた服を拭いていく。

部屋の扉が開かれて部屋着に着替えた美月が入ってくる。薄い水色のシャツと、かなり丈の短いレモン色のハーフパンツ。そこから伸びた白く長い脚が座り込んでいた陽太の視線の高さに現れて、思わず目を逸らす。

テーブルの向かいに美月が座り、彼女用のマグカップを手にとって烏龍茶を一口飲み込

んだ。着替えて少し落ち着いたのか、先ほどより顔色も良い。

ふっと息を吐いて、美月は力なく微笑む。

「さつきはごめんね」

「そんな。謝らなくていいよ」

陽太が言うと、美月は真剣な面持ちで見つめてきた。冷えた体が室温で暖められ、彼女の頬が少し上気している。その艶やかさに陽太は生唾を呑んだ。

静寂。

美月が何かを言おうとして、迷って口を閉じる。少し置いてからまた声を発しようとするも、やはり躊躇して体勢を戻す。

陽太にも分かった。彼女は過去について明かそうとしているのだ。

「彼……ネガに言われたからじゃない。双葉が、石黒くんには話すべきだって背中を押してくれたの」

彼女がきっかけを話し始める。資料館の後で双葉がしていた行動に、陽太はようやく合点がいった。

そして、一度口を開けば後は雪崩のように美月の言葉が紡ぎ出されていく。

「ずっと隠していた。私と、ペンモンのこと」

頷く陽太。それを聞く覚悟はとづくにできている。

「長くなるけれど、聞いてほしいの」

そうして、彼女の過去が語られ始めた。

眞白美月には生まれた時からずっと仲良くしていた同い年の友人がいた。名前を赤坂ヒナタという。近所に住む幼稚園で、二人は家族ぐるみで付き合いがあった。

色々なところに遊びに行ったり、いつも傍にいた。どちらの家族に聞いても、まるで本当の姉妹のようだったと言うだろう。その度に二人はどちらがお姉さんかで喧嘩をした。

保育園を経て小学校に上がっても、二人の関係は変わらないまま。それどころか、学校生活の中でさらに親密になったという。美月にとってヒナタはかけがえない親友だった。ヒナタはいつも明るく元気で、クラスの中心人物になっていった。一方、引っ込み思案で大人しい美月はあまり前に出る性格ではない。学業も運動も得意なヒナタに対して、どちらも不得手とする美月。能力的な差が出て二人は変わらず仲良くしていた。

「もしかすると、あの頃の私はヒナタに少し嫉妬していたのかもしれない」

美月が苦笑する。

小学校五年生になった頃だ。体育の授業中に突然ヒナタが倒れた。日差しが暑い時期だったので熱中症や貧血の類かと思われたが、彼女が保健室に運ばれた後ほどなくして学校に救急車がやってきた。ヒナタが担架で運ばれていくのを、美月はグラウンドから見ていた。

それからだ。ヒナタは時折学校を休んで病院に向かうことが多くなった。長い時には検査入院として数日空けることも。

美月はその度にお見舞いに行った。病室でのヒナタはあっけらかんとしていて

「みーんな大袈裟なんだよ。アタシは全然へっちゃらだけどね」

と、大きく口を開けて笑ったものだった。

しかしそんなヒナタの言葉とは裏腹に、やがて彼女は正式な入院扱いとなった。最初に倒れてから半年と少し経った頃の話だ。

「そこで初めてヒナタは教えてくれたの。とても覚えられないくらい長くて難しい名前の病名。日本では治せるお医者さんがいないと言っていたわ」

その時の美月は知らなかったが、ヒナタは病気の話をしてくれた段階で既に一年の余命宣告を受けていたらしい。

それでも、ヒナタはずっと明るかった。

病院内でも出来て美月が毎日見舞いに来なくてもできる遊びを考えて、当時まだ流行りはじめだったデジモンコネクトオンラインと一緒にやらないかと誘ってきた。

「オンラインの世界なら病室からでも遊びに行ける。これでまた一緒に遊べると、ヒナタは元気に伝えてきたわ」

時間こそ決められていたものの、病院の計らいでパソコンとヘッドマウントディスプレイを使う許可が出た。病室から彼女は電脳世界へとログインできるようになった。

その日から、美月とヒナタは毎日ゲームの世界で会うようになった。

たまの外出許可が出た時も、二人でゲームセンターに行つてはデジモンを遊び倒すような日々が続く。

ゲーム内のあらゆるエリアで、様々なロケーションを見て過ごした。

草原や海などの自然を見て、怪しい幽霊屋敷で肝試しもした。時には危険を孕んだ風の吹き荒ぶ渓谷や機械都市も、美しい神殿のような場所まで。このゲームの世界では、どこでも二人で遊ぶことができた。

「正直、私はモンスターとかさっぱり分からなかったけれど。ヒナタと遊ぶためにデジモンを続けたの」

さらに美月は、ここから意外なことにデジモン育成の才能を発揮し始める。

ヒナタはそれを苦手としていたが、その間に美月のデジモンは次々に進化した。やがてゲーム中でも屈指の育成難度を誇るという究極体まで、パートナーを育て上げた。

ヒナタは目を輝かせる。

「すっごいよ美月！ 美月はデジモンを育てる天才だね！」

勉強も運動もからつきしだった美月が、はじめてヒナタに勝てる趣味。しかもそれをヒナタも喜んでくれている。

嬉しかった。美月はデジモン育成にのめり込んでいく。

「ヒナタが勧めてくれて、バトルの大会にも出るようになった」

美月と、彼女が育てたヘクセブラウモンは無類の強さを誇っていた。

小学六年生の夏から出場し始めた予選大会を駆け上がり、年末の国内大会、そして年度末の世界大会を制して、美月はあつという間にゲーム内最年少チャンピオンになった。

そんな美月の優勝を、ヒナタは誰よりも祝福してくれた。

「私の試合を見て応援してくれるうちに、ヒナタは当初宣告されていた余命の一年を越えていた。私が勝てばヒナタが喜ぶ、ヒナタが生きていられる……なんて、都合の良い夢にすぎるようになった」

中学生に上がり、美月はさらにデジモンバトルに精を出した。ヒナタの容態も安定している。

順風満々。

これだけ元気ならば、もしかすると病気も治ってヒナタは助かるかもしれない。

「そんなわけ、ないのよね」

それでも、小学六年生が限界だと言われたヒナタは、中学一年、そして中学二年へと進学した。直接学校に通うことはできなかったが、余命を二年も越えたのだ。

同時に、美月も中学二年生にして世界大会を三連覇した。ヒナタの笑顔を見たいがため、ゲーム史上誰も成し得たことのない快挙を達成したのだ。

——すべて、ヒナタのため。

だが時間はこれ以上待ってくれなかった。

年度末の世界大会で美月が三度目の優勝を飾った頃、ヒナタの病気は急激に進行した。いつの間にか痩せてしまった体。呼吸器を口に添えられ苦悶の表情を見せるヒナタに美月は言葉を失う。大会を勝ち進んで喜んでくれるヒナタは、本当はこれまでもずっと苦しんでいたのだ。美月の前で気丈に振る舞っていただけだったのだと、ようやく気がつく。

そんな時、ヒナタは言った。

「ねえ美月？ アタシ、もう一回……デジモンの世界に行きたいなあ」

か細い声でお願いしてきた。

痩せた手ではコントローラーの操作すらおぼつかない。ヘッドマウントディスプレイの視覚情報だけでも体への負担が掛かる。そうした事情もあって、数か月前には彼女の病室からパソコンなどは撤去されていた。

でも。もう長くないであろう、彼女のささやかな願い事。

だから美月は——禁忌を犯した。

「当然もう外出許可なんて出るわけなくて。だから私は、病院の目を盗んでヒナタを外へ連れ出したの」

ヒナタを車椅子に乗せ、深夜まで営業しているゲームセンターに向かう。ヒナタを支えながらデジモンコネクトオンラインにログインした。

元気だった頃に巡ったスポットを次々に巡り、二人で一生分笑い合った。ゲーム内のヒナタは病気が嘘のようにはしゃいでいた。

ゲーム内を観光し尽してから、ヒナタはそつと自分のデジヴァイスを差し出す。「これね。今、ペンモンっていうデジモンを育ててるの。でもアタシじゃ上手く育てられないから。美月に託してもいい？」

いつも通りの頼み方。明るく、ちよつと茶目つ気のある笑顔でヒナタは言った。

「……そんなの、自分で育てなさいよ」

美月は今を信じたくなくて、こちらもいつも通り少しづつきらぼうに返してしまう。

ヒナタは、美月の目をまっすぐ見ていた。

「ねえ美月。アタシ、バトルしてる美月が好き。キラキラ輝いていて、かっこよくて優しい声色で話しかけてくる。」

美月は会話を聞きながら、心の中で何度も叫んでいた。

やめて。そんなこと言わないで。だって、これじゃ別れの言葉みたいじゃない。

「だからね、美月は——」

その時ヒナタが最期に何と言ったのか、美月は今も思い出せないでいる。

気がつけば病院の待ち合い椅子に座っていて、赤く光る手術中のランプを見つめながらポーツとしていた。隣の席からヒナタの両親が泣いている声がある。

やがてランプが消えた。ベッドの上で眠るヒナタが、医師の人たちに運ばれて出てくる。安心しきったような、穏やかな寝顔だった。

そこまで話して、美月は陽太に伝える。

「病院で最後まで延命することが出来たはずのヒナタを、私が連れ出した。私が、ヒナタを殺したの」

「でも、それは！」

陽太は思わず反論しようとした。仕方なかった、と言うつもりだった。

だがそれを上回る悲痛な声で美月が遮る。

「分かってる！ ヒナタの願いだったことも！ あのまま病院で治療しても既に限界だったことも！ 全部！ 全部！ ……でもっ」

再び感情が爆発して、美月は泣き出ししていた。

「言い訳はいくらでもできる。だけど私は……誰かに罰して欲しかった。お前のせいだとお前が連れ出さなければと責められて、それにごめんなさいと言うことができれば、ずっとずっと楽だった」

美月は謝りたかった。行き場のない気持ちを、せめて誠心誠意謝罪することで償いたかったのだ。

ところが、治療ベッドの上で覚めない夢を見ているヒナタの顔を見て、彼女の両親は美月に言った。

「最期に娘の願いを聞いてくれて、ありがとう」

ヒナタの両親は、ずっと前から彼女の死に対する心構えをしていた。最後まで事実を信じていることができなかった美月とは対照的に、もう既に現実を受け入れていたのだ。

だからこそ、美月を氣遣って優しく伝えられた。親友を失った中学生の少女に向けた慰めの言葉。

そうして美月は許された。

——許されてしまった。

「自分の行いも、ヒナタの死も受け入れられないまま。私は何事もなく日常に帰されてしまった。どうしていいのかわからなくなった」

美月は顔を手で覆い、そのまま泣き崩れる。

聞きながら陽太は、ゲーム内でペンモンに言われたことを思い返す。

「美月の悩みはね、他の人が聞くとなんて事ないような話かもしれない。そんなの気にしなくていいよって答えて終わる人もいるかも」

美月自身がそう言ったように、赤坂ヒナタは美月が病室から連れ出したか否かに関わらず、既に危うい命だったのだろう。だから美月は責められなかった。

実の娘を失ったヒナタの両親にまで感謝されてしまった。

話を聞いて理解したとは言えない。親友の死に関わった彼女の経験は陽太の想像を超える出来事で、その心情を完璧に慮ることはできなかった。

ペンモンの話を聞いていなければ、もしかすると陽太も「気にするな」と答えていたかもしれない。どちらにせよ美月は悪くないと。

だが事実を重く受け止めている美月に、その言葉はあまりに酷だ。

「眞白さん。……話してくれてありがとう」

陽太は静かにお礼を言った。

それから、美月が泣き止むのを見守った。無理に声をかける必要はないと思い、陽太はただ無言で待つ。

やがて、美月は今の気持ちを話し始めた。

「私。ヒナタが死んで、それでもペンモンを育成する自分が分からなくなってた。それをヒナタへの罪滅ぼしにしたかったのか、なんとなく放っておけなかっただけなのか」

友達から託されたデジモンを彼女はずっと育ててきた。食事もトイレも、トレーニングもきちんとこなして、オフィシャルショップのアドバイザーにも相談しながら。

ペンモンは進化しなかった。

陽太は今日の出来事を通じて、ある仮説を立てていた。ペンモンの気持ちも聞いて、美月から伝えられた過去も照らし合わせると、なんとなく見えてくるものがある。

それを確認するために問いかける。

「眞白さん。友達のことを抜きにして、デジモンのことをどう思ってる？」

「デジモンのこと……?」

美月は答えに悩んだ。双葉にも聞かれた質問だが、自分の気持ちから分らない。

「今日、ペンモンと話をした。ペンモンに進化したいか訊いたら、もちろんだと答えてくれた」

口にするだけで、陽太は自身の推測を確認する。

あの時のペンモンは進化に何の不安もない、純粋な目をしていて。だからこそ陽太はこの考えに至ったと言える。

「たぶんペンモンが進化しないのは、眞白さん側に進化させたくない理由があるんだと思っただ」

要因は美月の側にある。それが陽太の結論だった。

そう言われて、美月はもう一度考える。

デジモンのことをどう思っているのか。ペンモンを進化させたいのか。今、自分がどうしたいのか。

ずっと、ヒナタのために続けているんだと思っていた。彼女との付き合いで始めたゲームを、彼女が亡くなった後も唯一の繋がりだと縋っているのだと。託されたデジモンを捨てられなくて、半ば惰性でここまで続けてきただけだと思っていた。

違うのだろうか。

「すぐに答えを出さなくてもいいと思う。考えて、分かったら小緑さんとも部室で話そう」

陽太が優しく言う。ふと窓を見ると、雨は既に止んでいて静かな夜の景色が広がっていた。

弱々しくも、美月が微笑む。

「今日は本当にありがとう。私……きちんと答えを出すわ」

彼女のまっすぐな目を見て、陽太も笑った。ペンモンには「陽太がきちんと答えを出してほしい」と言われたが、必要なヒントは出揃ったはず。後は美月自身が考えることだと陽太は思っていた。

「ネガのこともあるし、今後については相談しよう。それじゃ、また月曜日に」

美月の心にかかった雲も、少しは晴れたのだろうか。陽太は立ち上がり、美月の部屋を後にする。

○

「部長ー！ こっちつす！」

翌日、日曜日。

突然呼び出されて学校近くのハンバーガーショップにやってきた陽太。休日なのもあつ

て店内はかなり混みあっていたが、入り口近くの見つけやすいテーブル席に座っていた双葉が手を振っている。薄い紫のブラウスと黒のカーゴパンツを合わせたカジュアルな出で立ちだ。

「どうしたの小緑さん。急いで話したいって」

陽太が対面席に座る。双葉は注文してあったハンバーガーを口にしながら、呑気に言った。

「いやあ、ハンバーガーの甘い誘惑があたしを呼んでたんす！」

「はい？」

ポカンとする陽太。双葉は「ノリ悪いっすね」などと口を尖らせた。

「冗談っすよ！ コカトリモンに店が襲われる前に、さっそく本題っす」

何を言ってるんだと陽太がツッコむ間もなく、双葉は持ってきていたタブレット端末をテーブルに置き、何かの資料を見せてきた。

画面には写真が載っている。――ネガだ。

「昨日の一件があったので、このいけ好かない男が何者なのか、あたしのいるコミュニティで聞きまわったりしたんです」

彼女が振り所としているデジモンのゲームコミュニティ。聞くところによるとかなり規模が大きいようで、様々な人物が意見交換や交流をしているらしい。双葉はあの後コミュニティでネガの情報を探していたらしい。

翌日にこうして情報を伝えられるほど調べあげたのだとしたら、物凄い執着心だ。ネガの態度に双葉はだいぶお怒りだったのだろう。

「この男、ゲーム会社の御曹司様みたいっす。名前は御影ハイネ」

表示されているデータを指差す双葉。ミカゲワークス。知らない社名だったが、名前のとおりこのゲーム会社に所属しているらしい。会社社長の息子だと記載されている。

「で、この会社。デジモンコネクトオンラインの開発をしてるんすよ」

「？　こんな会社名だったっけ」

陽太がデジモンコネクトオンラインの運営企業を思い出そうとする。が、すぐに双葉が思考を遮った。

「運営の大本じゃなくて、開発協力の一つっす」

デジモンコネクトオンラインは大規模なオンラインゲームで、まだまだ世に普及していないフルダイブ型の先駆けとなったタイトルだ。その開発は多くの会社と連携して行なわれており、大手ゲーム会社から名も知れぬ技術提供企業まで多岐にわたる。

ネガこと御影ハイネが所属するミカゲワークスも、数多ある協力会社の一つというわけだ。

「でも、それがどうしたの？」

まだ事情が掴めず、陽太は問いかける。

「問題なのは、この会社の持つてる技術つす。ここはデジモンのログインシステム関係で協力しているんすよ」

双葉がタブレットのページを送ると「脳波や筋肉の動きを検知してゲーム内でアバターを動かす研究」という項目が出てきた。ミカゲワークスが技術特許を取っており、それをデジモンコネクトオンラインに提供しているらしい。

確かに凄い技術だった。体を直接動かさずとも、動かしたいと考えた脳波を検知してゲーム内の体をコントロールできる。これのおかげで、体の不自由な人でもフルダイブ型のゲームを楽しむことができるようになった。病気だった赤坂ヒナタも……と考え、陽太は昨日のことを思い出して少し苦い顔をした。

しかし、まだ話が見えない。

「えーっと、この会社がデジモンの開発に関係してるのは分かったけど。それで？」

「もう！ 鈍いつすねー。この会社はログイン関連の基礎技術に関与していて、情報にも直接触れるんです。他人のログイン履歴を見れる可能性が高いんすよ」

他人のログイン情報を直接触れる？ 陽太はまだ首を捻っている。

「昨日、あいつがわざわざ眞白つちに宣戦布告しに来たのは、あそこに眞白つちがログインしていることを知っていたからだと思っただんす」

そう言われてようやく見えてくる。同時に、なんだかききな臭いことになってきたと陽太は思った。

相手はデジモンの開発に関わっている人間で、ユーザーの情報を一方的に調べられる立場にいた可能性があるということ。もちろんユーザーの情報は機密のものだろう、それを勝手に確認した上で私的に利用していたとしたら大問題だ。

「なんでそんなことを。眞白さんのストーカーとか？」

あり得ないと思いつつ疑問を口にする、彼女は指をパチンと鳴らした。

「ビンゴ！ と言っても、向こうは愛を囁きに來たんじゃないっすけどね。これを見てほしいっす」

双葉はタブレットの画面を別のデータへと入れ替えて見せてくる。

今から三年前、美月が最後に出場した予選大会の対戦表だ。

「ほらこれ。眞白つちがネガと戦ってるんすよ」

見ると、確かに三回戦目でアクエリーとネガがバトルしている。結果は言うまでもなく、アクエリーの勝利。この試合で美月は決勝大会へと駒を進めた。

陽太は当時から美月の試合を追いかけていたが、この時の対戦相手がハイネだとはまったく気づいていなかった。翌年からの快進撃を知っていただけに、何故気づかなかったのかと自身に呆れてしまう。

「この頃のネガはまだ無名ですし、予選の出来事つすからね。翌年から二連勝した人と同一人物だとは中々気づかないっすよ」

双葉が引きつった苦笑をみせると、陽太も話が掴めてきた。

「い、いやいやいや！　じゃあハイネは三年前に予選で負けたことを逆恨みして、復讐しに来たってこと？」

流石にそれはないだろうと言いたげな陽太の口調に対して、双葉は真面目に頷く。

「コミュニティで聞いたんすけど、ネガはその後の二年間、対戦相手のことをすべて調べ上げて徹底的に対策してたみたいっす。使用デジモンの特徴や対戦スタイルはもちろん、相手の個人情報を使つて脅し紛いのこともやっていたみたいで」

昨日本人に会った時もそれに近いことを言っていたはずだ。美月に一度負けたことをきっかけに、相手を完膚なきまで叩き潰す人間に変わったということだろうか。

それでも陽太はイマイチ納得しきれない。これはゲームの試合だ。真剣勝負は大事だが、そのために会社のデータを使ったり相手のプライベートを調べたりまでするだろうか。

「相当な完璧主義者だったんでしょね、こいつ！」

双葉が吐き捨てるように言う。美月への煽り行為に未だ苛立っているようで、タブレット内の写真にガンを飛ばしていた。

行動について理解はできないが、ひとまずハイネという人物が何をしていたのかは納得できた。

最近になってゲームに再びログインするようになった美月を見つけ、三年前の敗北に対して復讐しようと言うのだろう。もしかすると、毎年大会に出場していたのも美月を探していたのかもしれない。自分を負かした唯一の相手を、衆目に引きずり出して敗北させるために。

陽太は困惑しつつもなんとか事情を呑み込む。

すると、双葉が心配そうに言ってきた。

「本当は眞白っちも呼んで、急いでこの話をしたかったんすけど。昨日の今日ですからね。……あの後、大丈夫でした？」

双葉に言われるがままゲームをログアウトした後のこと。確かに説明し損ねていた。彼女の過去については本人から直接聞くべきだと考え、陽太はあくまでも昨日の出来事だけを簡潔に伝える。雨の中、美月を家まで送ったこと。その後、過去についての事情を話してくれたこと。そして最後に見せた彼女の眼差しを。

「眞白さんはきつと結論を出す。僕は待ってあげよう」

うんうんと肯定する双葉。そして、若干ニヤつきながら聞いてきた。

「で……部長？」

「ん？　何？」

その問いかけが何を意味しているのか分からず、陽太は首を傾げる。

双葉はさらにえくぼを深くした。

「家にお邪魔したんすよね？　眞白っちと、二人きりになったんすよね！？」

陽太に過去のことを話すべきだとアドバイスしたのは双葉だ。わざわざ自宅からゲームにログインして別行動を取り、解散後二人きりになるよう誘導したのも。陽太は昨日の流れを思い出し、意図を汲み取った。

「な、なんにも無かったよ！」

その言葉に、双葉は心底信じてなさそうな顔をした。

○

翌日、美月は学校へとやってきた。ネガから言われたことやその後の話もあったため休みを取るのではと陽太は考えていたが、彼女は想像以上に強かったようだ。

放課後に二人で部室に向かい双葉と合流する。既に部室にいた彼女は、テーブルいっばいに色々と資料の紙を広げていた。

「それは？」

陽太が聞くが、双葉はかぶりを振って先に美月へと話しかける。

「まずは、眞白っちの意見を聞きたいっす」

今後について答えを出す、そのつもりで美月もやってきてるはずだ。確かにそこから話を聞くのが筋だろう。

美月は頷き、あくまでも冷静に宣言する。

「私、ネガと戦う。このバトルが最後になってもいい。悔いのない戦いをして、自分と向き合いたい。だから……二人も手を貸してほしい」

力強い一言だった。まだまだ本人の中で整理のつかないことも多いはずだが、それでも彼女は過去のしがらみに向き合うため戦うことを決めた。ネガ自身をどうするという以上に、己との戦いになるのだろう。

彼女の決意を受けて、陽太と双葉もグツと拳に力を籠める。すると、それぞれのスマートフォンやデジヴァイスから声が響き渡った。

「もう、美月ったら。戦うのはアタシたち、でしょ！」

「僕らもデジモン側の意見として協力するよ」

「オウケイ！ 盛り上がりすぎてきたぜー！」

パートナーデジモンたちから心強い宣言がなされ、三人はニコリと微笑む。

そして双葉は、テーブルに並べた資料を指差した。

「ではでは、これを見て欲しいっす！」

「何それ」

陽太が再び聞くと、今度は素直に答える。

「ネガが過去に育てていたデジモンや戦略のデータっす」

並べられた資料には彼が優勝した過去二回の大会はもちろん、美月に負けたという三年

前の大会まで遡って使用したデジモンの能力や戦略が事細かにまとめられている。

へえ、と感心した声をあげる陽太。

「これ、昨日一日で調べたの……？」

「当然っす。眞白っちのためですから」

屈託なく笑う双葉の顔を見て、その熱意に感動すると共に陽太は少しだけ怖くなった。彼女に隠し事をして、翌日には丸裸にされてしまいそうだ。

とにかく。今はこの資料をもとに対策を考えなくてはならない。

相手はいけ好かない御曹司様で、裏では対戦相手を脅すなど卑劣な行為をしている憎むべきバッドプレイヤーだが、究極体を育て上げて大会を二連覇している実力は本物だ。全盛期の美月ならばそれすら退けてくれると確信が持てたが、今は成長期のペンモンを連れて挑もうという状況。はつきりいえば無謀な行為である。

それでもやると決めた美月。陽太と双葉にできるのは、彼女の勝率をわずかでも押し上げることだけだ。

「それですすね。ネガの使用するデジモンにはいくつか特徴があるっす」

「特徴？」

双葉は調べてきた相手のスタイルを説明する。

「まず第一に、これまでの試合すべて機械系のデジモンを使用しているのが分かります」

過去の試合データを順番に指差していく双葉。見ると、ネガは同じ年の大会であっても相手によってデジモンを交代しており、複数のデジモンを育成・所持していることが分かる。ムゲンドラモン、キャノンドラモン、ライデンモン、アルティメットブラキモン、ヘヴィーレオモン……と、美月は名前を見ても分からなかったが、なるほど確かにサイボーグ型やマシンの究極体だらけだ。

双葉は続ける。

「次に、重量級のデジモンばかりっすね」

「よく分からないけれど、機械系のデジモンだから当たり前じゃないの？」

美月が疑問の声を漏らす。

基本的には正解だ。サイボーグやマシンは言葉通り全身を機械化しているため金属の体や武装を備えている。そうした積載物も相まって、鈍重なデジモンが多い。

しかし、少なからず例外も存在する。

「たとえばマシン型でも、機関車の形をしたグランドロコモンっていうデジモンは見た目どおり走ることに特化してるんだ。他にも、スピードファイターのフウジンモンやタイガーヴェスパモンなんかもあるね」

「流石部長、良いフォローっす」

陽太が様々なデジモンの名前を挙げたことに双葉はうんうん頷いた。

「ネガの個人データが重量級デジモンの育成に適しているのか、意図してそうしたデジモ

ンばかりを育てているのかは分からないっすけど。これまでの使用デジモンには偏りがあるっす」

「僕たちがやるべきは、同じようなデジモンを使ってくる想定して対策を考えること、だね」

言いながら、陽太は資料をじっと見つめる。

どれだけ考えても状況は不利だ。

かつて陽太と美月が戦った際、ペンモンは成長期でありながら上のレベルであるパラサウモンに勝利した。だがそれはレベル差が一つだけで、美月の戦略が綺麗に決まったからできた奇跡的な芸当だ。今回は成長期から三レベル離れた上位種である究極体とのバトル。能力値の違いがそのまま勝敗を決してしまうだけの、絶対的な差がある。

だがあの時レベル差を覆す奇跡を起こした事実もまた、確かなものだ。

そして。

「陽太。これって、僕らの試合に似てないかい？」

スマートフォンから聞こえるパラサウモンの声に、陽太は同意する。

「そう。あの時、眞白さんとペンモンは重い動きで戦う上位レベルのデジモンに、パラサウモンに勝ったんだ」

パラサウモンは機械系デジモンほどの重量ではないとはいえ、状況は似ている。

二人で納得する陽太たちに、話を聞いていた美月が問いかけた。

「どういうこと？ 石黒くんと戦った試合にヒントがあるの？」

「……たぶん。あの試合と、相手が機械系デジモンを使ってくることを掛け合わせれば、少しは作戦が練れるかもしれない」

陽太は一所懸命に思案する。針の穴に糸を通すような可能性だが、賭けるならそこしかないと思えた。

#### 4…過去と今と未来と

決戦の日がやってきた。

事前にネガが大々的に告知したこともあり、フリーバトルにも関わらず多くのプレイヤーたちが観客席に押し寄せている。

現チャンピオンと、かつて三連覇を成し遂げた伝説のティマー。注目されるのも当然と言える一戦だ。

直前まで美月と共にいた陽太と双葉だったが、試合中のバトルフィールドに三人で並ぶわけにはいかない。現在は他のプレイヤーと同じように観客席へ腰かけている。

「眞白っち、大丈夫っすかね」

「僕たちは信じるしかないよ」

分かっていたことだが、ペンモンは結局進化しなかった。美月の悩みが進展して状況が変わることに一縷の望みをかけたが、そう上手くはいかない。

このバトル自体が勝手な申し込みである以上棄権の選択肢も最後まで残されていたが、美月は自分へのケジメだということでバトルを下りようとはしなかった。もちろん陽太たちもそのつもりでアドバイスを続けてきた。

彼女は負けてもいいと思っている。それでも戦って、今まで迷ってきた自分と訣別するつもりだ。

「けど、もしこんな大勢の前で負けたらフロストクイーンの名声は……」

「それでもいいんだ。眞白さんは過去の栄光より、今と向き合う決心をしたんだから」

実際、陽太にとっても無敗の女王であったフロストクイーンへの憧れは未だ強い。進化できないペンモンを連れ、万全でない状態のバトルで敗北するところを見るのは心苦しいものがある。

だが、できるアドバイスや相談はし尽くした。後は先ほどの言葉どおり信じるしかない。バトルフィールドには既にネガが立っている。以前出会った時と同じ、黒と金の煌びやかなスーツ姿。整った顔立ちが故に女性ファンが多く、客席から黄色い歓声も漏れ聞こえる。

そこへ美月が現れた。こちらも全盛期から変わらぬ白と青の騎士服。隣にペンモンも連れ立っている。

「おやおや……。これは嘗められたものだ」

ペンモンを見てネガは嘲笑した。

客席で様子を見ていたプレイヤーたちもざわつき始める。

「おい、あれって……」

「フロストクイーンのデジモンはまだ成長期じゃないか」

「なんだよ、こんなの勝負にならないじゃん」

周りのどよめきを聞きながら陽太と双葉も不安げな顔を見せる。これが初見だったら陽太たちも同じ反応になっただろう。それだけ、レベル差は確実な指標になるのだ。

しかし、フィールドに立つ美月とペンモンは堂々としている。

「さて、始めましょうか」

「行くよ美月！ 任せといて！」

意気込む二人。ネガが肩をすくめて大袈裟にやれやれという動きをとる。

「作戦ぐらいは練ってきたのかもしれないませんが、そのデジモンではね。オーディエンスには申し訳ないことをしました」

「減らず口はいいわ。開始宣言を」

挑発的な態度をとるネガに見向きもせず、美月がバトルコマンドを実行。

発言に乗ってこない彼女に眉をひそめながら、ネガも勝負の準備を開始。先ほどまで呼び出されていなかった彼のパートナーデジモンが出現する。

その姿を見て、陽太は焦った。

「ガンドラモンだ……！」

究極体のマシーン型デジモン、ガンドラモン。双葉がネガのことを調べて得た情報とおり、彼は機械系デジモンを使用してきた。そこまでは予想どおりだ。

それでも慌てる陽太に、双葉が疑問をぶつける。

「あたしたちの予想どおりマシーン型っすよ！ 作戦が利くんじゃないっすか？」

「いや……」

陽太が発言する前に、フィールドに対戦開始のアナウンスが響き渡る。

「《ネガ》バーサス《アクエリー》。バトル——スタート！」

真っ先に美月とペンモンが動く。

「ペンモン、アイスプリズム！」

「よおし！」

ペンモンが地面に手をつき、その体から放つ冷気でフィールドを凍らせていく。そこから突き出た氷柱が、ガンドラモンめがけて牙を向いた。

陽太のパラサウモンと戦った時と同じ始まり。まずはペンモンの得意な氷の舞台を作り上げるつもりだ。

その姿をネガは指示も出さずにぼうっと見ている。氷柱がガンドラモンへ襲いかかったが、金属で出来たガンドラモンの体には傷ひとつ付けられず、氷柱はぶつかると同時に砕けていく。

「やっぱり、そのままじゃ効かないわね」

「大丈夫、まだまだ行くよ！ アイスプリズム！」

ペンモンが前向きな姿勢で次々にアイスプリズムを撃ちこむ。

そのうちの一発が、ガンドラモンの脚部パーツに飛び込んだ。氷の刃は金属の表面を上手く避けて、足関節の隙間を抉った。ガンドラモンが少しだけよろめく。

「入った！」

作戦その一。

ネガは機械系のデジモンを多く育てているタイマー。予想どおりサイボーグやマシーン型のデジモンを使用してきた場合、氷の牙で関節部を狙う。金属で覆われた外部の体に傷をつけられなくても、複雑な配線や動力部を抱える内側は弱点になり得る。過去にパラサウモンの首神経を狙って気絶させたように、ガンドラモンが現実の機械に近い仕組みで動いていることを突いた戦術だ。

決戦までの一週間で作戦を立てた美月たちは、アイスプリズムを確実に狙いへ差し込めるよう練度を高めていたのだ。

しかし、当然一撃というわけにはいかない。

一瞬虚を突かれたガンドラモンだが、致命傷にはならずそのまま動き出す。

「なるほど。関節の隙間を狙おうということですか。確かに、力ではなくテクニクでカバーするならそうでしょうね」

ネガが余裕たつぷりの笑みを浮かべている。大袈裟にパチパチと拍手を交えて美月を称賛した。

美月は挑発的な相手の発言を聞き流し、作戦に集中する。

次の氷柱もパーツの隙間に潜り込ませることに成功。鋭利な刃で相手の足を捉えるが、やはりガンドラモンに大きな変化は見られない。ガンドラモンの体力ゲージもほぼ満タンを維持している。

ネガは、攻撃を受けても一向に指示を出さないままだ。

美月は思わず叫ぶ。

「遊んでいるつもり!？」

その言葉にネガは溜息をついた。仕方ないので動いてやるか、といった調子で。

「……ガンドラモン。デルブリッツ」

ガンドラモンの両手に備えられている六連装リボルバーの銃口が、ペンモンに向けて構えられた。

そのまま間髪入れずに、発射。

「ペンモン、逃げて!」

美月の指示を受けてペンモンは移動を開始。これまでに張った氷の上を滑りながら敵の弾を避けていく。

だが、ガンドラモンの攻撃は一撃一撃が重い。弾丸が地面に弾けるたびに爆発を起こし、直撃から逃れていたペンモンも爆風に吞まれて大きく吹き飛ばす。

「ペンモン!」

飛びあがったペンモンが地面に叩きつけられる。衝撃で肺から酸素が吐き出され、痛みですぐに身動きが取れない。

移動できなくなったペンモンにガンドラモンが迫る。

「プラッツェンクロイツ」

感情のこもっていないネガの平坦な指示。

ガンドラモンはその足でペンモンを踏みつけ、ゼロ距離でリボルバーを構えた。

「っ! ペンモン、今!」

相手の体重に押しつぶされそうになるペンモンだが、美月の声を聞いて力を振り絞る。自分に向けて構えられていたリボルバーの銃口めがけて、アイスプリズムを撃ちこんだ。

氷柱が刺さり、ガコンツと鈍い音が響く。発射口を塞がれたリボルバーから、ペンモンを討つはずだった弾丸が発射。爆発が逆流してガンドラモンの内部を焼く。火花が散り、

関節各部から煙を吐き出した。そのまま大きく後ろに倒れる。

成長期のペンモンが究極体に反撃の一撃を与えたことで、会場から大きく歓声が沸いた。双葉も万歳をして喜ぶ。

「やっぱり行けますよ！ 眞白っちとペンモンなら！」

「だと、いいんだけど……」

未だ浮かない表情の陽太。そのあまりに心配そうな顔に、双葉は怪訝そうな目を向ける。一方、思わぬ反撃を受けたネガからは少しだけ余裕が消えたようだった。

「銃口を狙うつもりでしたか。これは迂闊でしたね」

「どう？ 少しは戦術を理解できたかしら」

美月が返すと、ネガは苛立ちを隠せない様子で声を荒げた。

「くだらない小細工！ こちらが様子見していたら良い気になって……！」

美月と違って挑発には弱いようだ。ネガの明らかな変化に戸惑いつつ、あくまでも平静を保って行動する美月。

「ペンモン、まだ動ける？」

「だ、大丈夫……！ あいつ、重ッたいんだから！」

立ち上がるも、流石に究極体の猛攻には疲弊を隠せないペンモン。よろよろと体勢を立て直す。

そんな二人の掛け合いを聞き、ネガは忌々しそうに発言する。

「デジモン相手に同情ですか？ ゲームのキャラクターごときに友情ごっことは、ずいぶんと余裕なようですね！」

なるほど、と美月は思った。

彼はあくまでもゲームとしてデジモンバトルに挑んでいる。いくら意思疎通ができて、デジモンを相棒だと考えていないのだ。だから最低限の会話や指示しか出していない。言葉を発さない完全な機械のデジモンたちを多く育てているのも、彼の方針が反映された結果なのだろう。

負けてもいい、これをケジメだと思っていた美月だったが、ネガの孤独な戦い方に抵抗が生まれてくる。

再び、美月とペンモンはアイスプリズムを放ってフィールドを凍らせながら立ち回る。

先ほどまでは痛くも痒くもないといった対応だったネガとガンドラモンだが、アイスプリズムに手痛い反撃を食らったのが癪に触ったのだろう。氷柱が撃ちこまれるたびにすぐさま砲撃して碎いてきた。

しかしこれは悪くない。パラサウモン戦で実行した動きと同じく、碎かれた氷はやがてフィールド上に溜まっていきペンモンの移動領域として機能していく。このバトルエリアをアイスリンクに変えてしまえば、鈍重な機械系デジモンをも翻弄するチャンスが生まれるはず。

さらに、今回は陽太たちにアドバイスをもらった更なる作戦の布石にもできる。

「ペンモン、スライドアタック！」

氷を移動してガンドラモンの死角に潜り込み、そのまま体当たり。足を中心にダメージを与え、なんとか突き崩そうという動きだ。

とはいえ、機械の体にペンモンの打撃はほとんど効いていない。アイスプリズムでの内部ダメージを狙うことに比べると微々たる攻撃と言えるだろう。

相手へのダメージが少ないことに気づきつつも、ペンモンは出来上がった氷のフィールドを動き回り、ガンドラモンを翻弄し続ける。

アイスプリズム。移動して回り込み、スライドアタック。

しばらくの間、美月とペンモンはこの動きを繰り返した。

「ちょこまかと動き回っていますが、それでガンドラモンを攻略できるのですか？」

ネガが不敵に笑う。まだまだ余裕たっぷりといった表情だ。

しかし、ここでガンドラモンに異変が起きる。

「……きた」

先ほどまで動き回るペンモンを追いかけけるように首を動かしていたガンドラモンだが、明らかにその動きが鈍り始めた。元々素早いとは言えないデジモンだが、よりゆっくりとした機動になっている。

ネガが困惑の声をあげた。

「ガンドラモン？ 何をしていますのです！」

気づくと、辺りはペンモンが張り巡らせた冷気で凍りついていた。フィールド全体が冷え込み、客席でも冷たさを感じる。

この状況に、双葉がまた歓喜の声をあげた。

「やったっすよ！ ここまで完璧に作戦どおりっす！」

機械への対策として考えた、さらなる作戦。それが長期戦による冷気の充満だった。

デジモンに限らず、機械は冷え込めばそれだけ機動性が落ちる。コンデンサの動きが鈍ったり、内部の高温部品との温度差で結露を引き起こすなどの症状が起きやすくなる。

だから、ペンモンは滑りながらなるべく時間をかけていたのだ。

ガンドラモンがどれほどの気温低下に耐えられるかは定かではなかったが、ペンモンが持てる力をかけてフィールドを冷やし続ければやがて限界が来るはずだという、気の長い賭けだった。

「ペンモン！ 相手の動きが遅くなった今の間に、弱点を狙いましょう！」

「りょうかい！」

関節部を狙う攻撃に対しても、相手はすぐに反応する余裕が無くなっている。アイスプリズムがガンドラモンを貫き、内部パーツがバチバチとショートした。

金属パーツが擦れるような軋んだ音を立て、ガンドラモンが呻く。

効いている。

「これなら！」

美月は確かな手応えを感じて拳を握りしめた。  
ところが。

「……クッククック。フハハハハ！」

様子を見ていたネガが、声をあげて笑い始める。

「笑っている場合じゃないわよ。これで……」

「チェックメイト、ですか？ 浅はかですねえ」

ガンドラモンには確かにダメージが入っている。内部に攻撃が通っていることは体力ゲージにも表れているし、気温低下による蓄積効果も確実に相手を蝕んでいる。

だが、ネガはまだ余裕だ。

「お友達ごっこをしている君たちは、このダメージを見て可哀想だと焦るのですかね？  
ですがこんな駒、死ななければ何の問題ありません」

ネガが指を弾いた。

すると、ガンドラモンが背中に装備された多数の砲身を広げ、噴煙を撒き散らせながら  
空中へと上昇し始めた。

「やっぱり……！」

陽太が唸った。

「え？ えっ！？ が、ガンドラモンが飛んでるっすよ！？」

双葉が困惑する。

ガンドラモンは多数の銃口を備えており、見た目のとおり砲撃を得意とするデジモンだ。  
それはこれまでネガが使ってきたムゲンドラモンなどの種族と大きく変わらない。

だが、ガンドラモン独自の特徴としてその高機動性が挙げられる。ムゲンドラモンよりも素早さに秀でた性能をしており、敵まで一瞬で間合いを詰めるのが得意なデジモンだった。

デジモンの種族情報にそうした記述があることを思い出し、陽太は不安視していた。

ただ陸を移動するだけではない、ガンドラモンを高機動たらしめる何かしらの性能差が  
隠されているはずだ。それが。

「長時間空を飛ぶ設計にはなっていないませんが、スラストの噴出でこうして舞うことができるのです。足元を狙う程度の戦略では無意味だと理解できましたか？」

ネガが自慢げに解説した。

本来は敵との間合いを詰めるために瞬時に放つブースターのような機能を、ネガは空中  
移動のために強化して育成していたのだ。

こうなれば、フィールドを凍らせて冷やそうが、相手の関節部を狙って足を止めようが  
関係ない。

「そういえば、ペンモンは鳥型なのに飛べない哀れなデジモンでしたね。どうです？ 上から見下ろされる気分は」

冷気の気温低下も、アイスプリズムの刃も届かない上空に、ガンドラモンが構える。接近戦を主体とするペンモンには他に打つ手がない。

ガンドラモンが全砲身を地面に向けた。

「ゲヴァルトシュベルマー」

ネガの指示を受けて、ガンドラモンが全砲門を一斉掃射。

ペンモンに逃げる場所はない。フィールド全体を抉るように、ガンドラモンの砲撃が辺りを焼き尽くした。爆風が観客席まで土煙を運んでくる。大きな瓦礫も飛び交うが、それらは観客席を守るバリアが阻んだ。

土煙が薄れていくと、そこには穴だらけになったフィールドと、そこで倒れたまま動かないペンモンの姿があった。

「あ、ああ……！！ ペンモン！」

美月が震えあがる。

ネガは倒れたペンモンの姿を見て、高笑いをしていた。

「こいつは傑作だ！ 私のガンドラモンに傷をつけたお礼です、かつての主人のように犬死にしないで！」

やはり、赤坂ヒナタの死を愚弄しようとしている。その発言に、客席の陽太が憤った。

「あいつ！」

フィールド上の美月はというと、膝から崩れ落ちてペンモンを見つめている。幸か不幸かネガの挑発は耳に入らなかったようだ。

だが相棒のペンモンは瀕死の状態。デジモンへのダメージ以上に、美月の精神的ショックが大きい。

「そんな。ここまでやっても、届かないなんて……」

浮き上がっていたガンドラモンが地上へと舞い戻る。着地と同時にズシンッと地面が揺れるが、倒れたペンモンはピクリとも反応しない。

ネガはケラケラと愉快そうに笑う。

「ようやく復讐できます！ 三年前に私をコケにした、下らない女に！」

やはりそれが目的か。観客席まで轟くネガの声が聞こえて、陽太と双葉は困惑の表情を見せる。

しばらく笑い続けていたネガだが、やがて飽きたような調子で伝えた。

「戦術で力量を埋めることはできなかつたようですね。まだギリギリ体力が残っているようですし、そろそろトドメを刺してあげましょう」

ペンモンめがけて、銃口が構えられる。

美月は息を呑んだ。

敗北。そうなくても仕方ないと戦う前は思っていた。進化しないペンモンに拘ったのは美月自身だ。それはヒナタの忘れ形見だからで、ずっと引きずってきた過去を受け入れて今を生きるために、ペンモンともう一度公の舞台に立つことが使命だと思っていた。

だが、今になって後悔や自責の念が頭をよぎる。

自分にはもう打つ手がない。

その時。

「眞白さん！」

声が、聞こえた。

「眞白さん！ 眞白……眞白美月！」

観客席から自分の名前を呼ぶ声に美月は顔を上げる。

声の方向を必死に探すと、席から立ち上がり彼女に向けて必死に声を張り上げる陽太の姿が見えた。

「美月イ！ 君は過去の、赤坂ヒナタのことにも！ 今の、デジモンテイマーとしての自分にも向き合った！」

懸命に呼びかける陽太の姿に、気づけば観客席にいた他のプレイヤーたちも視線を集中させている。しかし陽太はそんなことに目もくれず、まっすぐ美月だけを見つめて叫んでいた。

「だから後は——未来を選んでほしい！」

「未来？」

考えてもいなかった言葉に美月は反応する。

声援は続く。

「君は、このバトルが最後になってもいいと言った！ 悔いのないバトルをすることが、自分と向き合うことになるよ！」

美月の覚悟。その言葉があったからこそ、こうしてネガとのバトルを受け、今まさに敗北を受け入れようとしている。

だが陽太は違った。

「僕は！ ……僕は、君にデジモン部に入ってほしい！ もっと沢山君とデジモンを遊びたい！ もっとデジモンを好きになってほしい！」

初めて会った時から、陽太は美月をデジモン部に誘おうとしていた。最初はフロストクイーンへの憧れだけが理由だったかもしれない。彼女の知名度で、できたばかりの部活を勢いづけたかったというのもあっただろう。

しかし今。

陽太にとって、美月を誘うことはそんな対外的理由ではなかった。

「僕は、君と……！」

少しでも言葉に詰まって、それでも躊躇せずに陽太は叫んだ。

「君ともっと、もっと一緒にいたいんだ！ 美月イイイ！」

憧れのテイマーとしてではなく、友人として。いや、もしかするともっと別の……。その言葉に美月は少し呆れたように、けれど心の底から優しい顔で微笑んだ。

「……バカ」

小さく呟いた声は客席の陽太には届かなかったが、美月自身は吹っ切れた笑顔で彼を見つめていた。

それと同時に、親友だったヒナタの最後の言葉が頭の中に響き渡る。

「ねえ美月。アタシ、バトルしてる美月が好き。キラキラ輝いていて、かっこよくて」

ずっと思いだせなかった続きの言葉。

「だからね、美月は——」

それが今、分かった。

「アタシのために無理をするんじゃないよ。美月自身のために、そしてこれから出逢ういろんな人のために……ずっと、楽しくゲームを続けてほしいな」

ああ、そうだった。

「ヒナタ。……そうだよ。ずっとそう言ってくれてたんだよ」

ヒナタのために大会に出場する美月。しかしその考えは早くから見抜かれていた。その度に彼女にたしなめられ、そして美月自身が本当はデジモンバトルを心の底から楽しんでいることを指摘されていた。

なのにペンモンを託されて、彼女がいなくなってから。美月の中でその感情は苦い記憶として封印してしまっていたのだ。

親友を失ったゲーム。自分が最後のトリガーを引いたかもしれない忌々しいゲーム。そんなものを好きはずがないと、楽しんでいたはずがないとどこかで言い聞かせていた。

「あなたの言葉を理解するのに、二年もかかった。……ヒナタ、ありがとう」

美月の止まっていた時間が、凍りついていた世界が動き出す。

彼女の心が立ち直っていくのに合わせるように、フィールド上に伏していたペンモンも最後の力を振り絞って立ち上がった。

「美月。……ヒナタの言葉、思いだしたんだね」

「ペンモン。待たせてごめん」

「何言ってるの。アタシはずっと信じてたよ。だってアタシは——美月のパートナーだからね！」

二人の視線が交わる。その目には一切の迷いがなかった。

負けてもいいのでケジメをつけたい。そんな思いから始まったこのバトル。

だが今は違う。

「私は勝ちたい。勝って、このデジモンコネクトオンラインで……みんなと出逢えた大好きなこの場所で過ごしたい」

ヒナタとの思い出が詰まったこの世界。

新しい友達と出会えたこの世界。

相棒であるペンモンがいるこの世界。

そして何より。今、美月にとって一番大切な人がいる、この世界で。

「行くよペンモン！ 私達は、負けられない！」

「大丈夫だよ美月！ あなたがどれだけ迷っても、アタシが……美月が未来へ飛ぶための翼になるから！」

その瞬間。

ペンモンの体が光に包まれた。

その光景を見ていた双葉が叫ぶ。

「あれは、進化！？ 成熟期になるんすか！？」

その言葉に首を横に振る陽太。彼は確信していた。

「これまで溜まっていた経験値は、それを飛び越える！」

進化を封じていたのは美月の心だ。彼女自身は過去に縛られ、今の自分を諦めていた。

そしてそれ以上に、彼女は自分の気持ちと未来を見ていなかった。

最後のトリガーは、彼女がデジモンを好きだと認めること。

赤坂ヒナタに付き合うために仕方なく、ではない。真白美月は大会で誰よりも眩しい瞳でデジモンバトルに興じていた。そんな自分に向き合うことが、最後の鍵だった。

「今更どんな手を打とうとも……！」

光の明滅に目を細めながら、ネガは忌々しそうに吐き出す。だが彼も美月が引き起こした逆転の可能性に焦っていた。

その震えるような声色を聞いて、美月は静かに笑みを浮かべる。ペンモンを包む光がさらに輝きを増した。

「ペンモン、ワープ進化！」

エネルギーが一点に集中し、それが爆発するように一気に解放される。風が吹き荒れ、氷の結晶がキラキラと舞い踊った。

ペンモンがいた場所に、美しい真っ白な羽根と輝く尾を持った巨鳥が立っている。

「フロスベルグモン！」

あまりの神々しさに恐怖すら覚えそうな美しい鳥デジモン——フロスベルグモンが、美月に視線を向けていた。

美月もそれに答えるように笑顔を見せる。

「フロスベルグモン。……綺麗」

「美月。これはあなたの心の美しさ。アタシがずっと知っていた、あなたの強さの表れ」  
フロスベルグモンが翼をはためかせ、舞い上がる。

その姿にネガは怒り狂いながら言った。

「戦闘中に究極体まで進化？　こんな茶番を認めるわけには！」  
ガンドラモンが砲を構える。

上空へと飛びあがるフロスベルグモンを追いかけて照準を合わせるガンドラモン。だが、その重い砲身を向ける隙は与えられなかった。

「イノセンスブリザード！」

フロスベルグモンの美しい翼と尻尾から、吹雪が舞う。先ほどまでペンモンが作り上げようとしていた氷のフィールド、それを圧倒的破壊力で一瞬のうちに形成した。

吹雪によってガンドラモンは全身を雪に覆われ、内部まで冷え切った状態で機能停止に陥る。

「ぐっ……！　動きなさいガンドラモン！」

「無駄よ。機械系のガンドラモンがこの寒さに耐えられるはずがない」

極限まで動きが鈍くなるガンドラモン。それでも構えた銃口から、無理やり四方八方に銃撃を開始した。

動くことで多少は体を温め直すこともできるだろうが、フロスベルグモンの敵ではない。明後日の方向に放射される銃弾を見ながら、次なる攻撃を構える。

「まだ動くなら……フロスベルグモン！」

「フリージングレイ！」

口元にエネルギーを溜め、即座に発射。冷気のビームがガンドラモンを確実に捉え、直撃した。

凍てつく波動が相手を氷漬けにし、辛うじて動いていたガンドラモンのあらゆる動作を完全終了させる。

「さあ、終わらせるわよ！」

美月が叫ぶ。それに応えるように、フロスベルグモンがひらりと空中で舞い踊った。

「ルインリバーヴ！」

透き通るような美しい歌が響き渡る。聴く者を魅了する歌だが、その波長に合わせて対象を内部から粉々に砕くというフロスベルグモンの必殺技だ。

音波による全体攻撃は誰かの影響なのかもしれない。美月はその誰かを想って、拳を強く握る。

もはや動くことすら叶わないガンドラモンは歌声を無視できない。響き渡る歌に合わせて、凍りついた体が爆散した。

ネガが言葉を失って立ち尽くしている。その場に、決着のアナウンスが流れた。

「ガンドラモン戦闘不能！　勝者《アクエリー》！」

うおおおおお！　と会場がどよめいた。誰も想像し得なかった逆転劇だ。

陽太と双葉もガッツポーズを取って喜んでいる。

そしてフィールドに立つ美月も、流石にポーカーフェイスではいられない。零れる笑み

に自分でもおかしくなった。とても嬉しい気分です笑っているのに、頬に一筋の涙が流れるのを感じる。

フロスベルグモンが美月の前に降り立った。

「本当にありがとう！ フロスベルグモン！」

「美月こそ、アタシのことを最後まで諦めないでくれて、ありがとう」

互いにお礼を言う二人。フロスベルグモンはさらに微笑んだ。

「アタシ、やっぱりバトルしてる美月が好きよ」

それはフロスベルグモンの感想なのか、ヒナタの言葉なのか。このバトルより前に言われれば、ヒナタのことを思いだして複雑な気持ちになったかもしれない。

だが今の美月は、その言葉を素直に受け止めることができた。

「うんっ！」

○

フロストクイーンの復活大勝利は、瞬く間にデジモンコネクトオンラインの一大ニュースとして広まった。成長期の状態で試合に現れてバトル中のここ一番という場面で進化したというドラマ性も含め、彼女の伝説はこれからも語り継がれることになるだろう。

バトルの後、美月たちは祝勝会を行なった。ファミレスで開かれた三人だけのささやかなお祝いではあったが、バトルの興奮を伝える陽太と双葉、それを満更でもなさそうな顔で聞いている美月の会話は何時間にも及んだ。

スマートフォンやデジヴァイスを通して、パートナーデジモンたちも満足そうだった。進化して姿が大きく変わったフロスベルグモンだったが、性格はまったくといっていいほど変化しておらず、美月の無茶な指示にズバズバと文句を言いながらも満足げだった。

なお、ネガこと御影ハイネの黒い疑惑もまたニュースとしてネット上に飛び交うことになった。個人情報調べて対戦相手を脅す悪逆の王者。時にはミカゲワークスのログイン情報を私的に利用している危険な人物。今はまだ噂の段階に過ぎず、彼が直接糾弾されるのは先のことだろうが、この噂を流した人物は「自業自得っす」とスッキリした顔をしていたそうだった。

さて。

打ち上げが終わる頃、美月は陽太に言った。

「ねえ、明日。少しでも付き合ってもらえる？」

突然の提案。どこか懐かしい誘い方に陽太は緊張しながら

「も、もちろん！」

と、こちらも懐かしい返事をした。

そんな二人の会話を聞いてデートだなんだと茶化す双葉。陽太と美月は苦笑したが、彼

女の言葉を強く否定したりはしなかった。

高校生の彼らは夜通し飲み明かしたりこそしなかったが、それでも随分遅い時間まで騒ぎ倒した。解散になって帰路につくと、全員が泥のように眠ったという。

それぞれがとても安心した寝顔をしていたのは言うまでもない。

#### エピソード

翌日。

制服姿の美月と陽太は、電車を乗り継いで少し離れた霊園に訪れていた。

「ヒナタ。待たせてごめんね」

手を合わせる美月。目の前にあるのは「赤坂家之墓」と刻まれた墓石。赤坂ヒナタが眠る場所だ。

合掌する前に火をつけた線香の煙が、緩やかに管を巻いている。

「二年以上、どうしても怖くて来れなかった」

美月が寂しそうに言う。陽太はそれを少し後ろから見守っていた。

「でもねヒナタ。彼に……みんなに勇気をもたらしたから。ようやく、前に進めた」

美月が後ろを振り返り微笑みかける。その表情に、陽太は照れくさくなって頬をかいた。

「私、ずっとヒナタのことを一番に考えてるんだって、自分に嘘をついていた。本当は自分が楽しくてデジモンをやっていたのに、どこかでヒナタのせいにして逃げてたんだと思う」

その口調はヒナタに向かって語り掛けているようでもあり、後ろの陽太に向けて心境を吐露しているようでもあった。

陽太もその話に聞き入る。

「ヒナタが言ってくれたとおり。自分と、大切な誰かのためにデジモンをやれるようになった。私の凍った世界を、溶かしてくれた人がいたの。ヒナタより大切な人に出会えた……なんて言ったら、嫉妬しちゃうかしら」

大切な人？

陽太が聞こえた言葉を理解するのに少し時間がかかった。

美月は墓の前から静かに立ち上がり、くるりと振り返る。

「ねえ、陽太」

「はい！……え、陽太？」

呼ばれ慣れていない下の名前に戸惑う陽太。

「なんで驚くの？あの試合中、陽太が先に呼んでくれたんじゃない。美月って」

試合中必死になって呼びかけたこと。陽太自身も無我夢中だったため半分忘れていたが、

今更言われて顔が赤くなる。

そんな反応にくすりと笑いながら、美月は言った。

「あのね陽太」

「な、なんでしよう！」

呼びかけに対して、陽太は緊張しながら返事をする。思わず声が裏返った。

出方を伺う二人。

しばしの沈黙を乗り越え、ようやく美月が口を開いた。

「陽太。私……ずっと前から、その」

陽太は少し身構える。

この話し出しは、やはりそういうことなのだろうか。思わず汗をかきながら美月の顔を見つめる。彼女の顔に心なしか朱色が差している気がしたが、多分それは陽太も同じだ。

美月は意を決して言った。

「ずっと前から考えていたけれど、デジモン部に入るわ」

「はい！……え？」

陽太は思わず目をぱちくりさせる。美月は意地悪そうな顔でニヤリと彼を見つめる。

「何？ 何か別のことを期待してたの？」

「え！？ いや、なんというか！」

美月が晴れやかな顔で伸びをする。吸い込んだ空気は線香の匂いがして少し渋い感じがした。眠る親友の前でふざけすぎるのもよくないだろうと、美月は歩き出す。

「これから長いんだから。よろしくね、陽太」

言われた陽太は、頭をポリポリと掻いた。

ネガとのバトル中に陽太が言ったとおり、これからは部活動を通じて一緒にデジモンを遊んでいける。思い悩んでいた美月では楽しめなかったかもしれない時間を共に過ごして、もっとデジモンを好きになってくれれば嬉しい。

そうだ。これからはまだ長い。胸の奥に広がる気持ちは、これから少しずつ確認していければいいだろう。

「よろしく、美月！」

完